

令和四年度

高山市近代文学館調査・研究報告書

令和五年三月

一般社団法人 高山市文化協会

序

一般社団法人 高山市文化協会は、高山市から委託を受けて、郷土に係わりのある文学作品を収集・調査して、作者の功績などを「高山市近代文学館調査・研究報告書」にまとめ、市民の皆様を紹介しています。

本年度は、第三十四回を迎えた近代文学館企画展において「近代の俳句・現代の俳句」と題して、今年生誕百五十周年迎えられた画家であり俳人の故小峰大羽氏と、高山市の文化振興に尽くした俳人故小鳥幸男氏の作品から、異なる時代で活躍された二人の俳句の世界を紹介したものを、報告書としてまとめました。

特に、昨年暮れに東京都在住の小峰大羽氏のご家族から、高山市近代文学館へ俳句などの資料が寄贈され、近代文学資料の充実が図られたのを機会に、その内七十点弱の作品と、小鳥幸男氏の未発表作品約六十点余も調査しました。今回、その成果もこの報告書にまとめました。

令和五年三月

目次

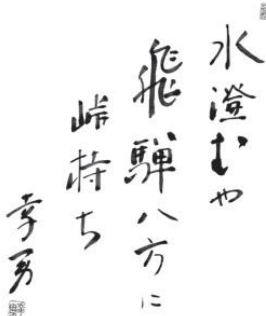
第三十四回近代文学館企画展「近代の俳句・現代の俳句」	1
第一章 小峰 大羽	2
第1節 写真	3
第2節 俳画	3
第3節 俳句	9
第4節 その他資料	18
第5節 絵図・絵画	26
第二章 小鳥 幸男	32
第1節 俳句	33
第2節 句集	54

第三十四回 近代文学館企画展

「近代の俳句・現代の俳句」——小峰大羽と小島幸男——

令和五年三月二十五日(土)～二十六日(日) 於 高山市図書館「煥章館」

第34回 高山市近代文学館企画展



**近代の俳句
現代の俳句**

——小峰大羽と小島幸男——





小島幸男
(昭和6年～令和3年)

俳人。高山市文化協会元会長、俳誌『飛騨』元代表。飛騨地方に多数の俳句会を立ち上げ後進の育成を行い、俳誌『飛騨』を創刊した。句集『雪』『トイの城』他。著書『飛騨百景』『小島幸男著作選集』。『飛騨の子守歌』、長唄『高い山から』を作詞。高山市自治功労者(昭56)、岐阜県学芸功労表彰(平10)、高山市芸術文化顕彰受賞(平18)。



小島幸男碑「山が来て坐り直せる土用かな」
飛騨の里文学散歩道



小峰大羽
(明治6年～昭和20年)

俳人、画家。東京神田生まれ。文学を尾崎紅葉、画を狩野洞谷に学ぶ。俳句では25歳から新聞、雑誌の選者として活躍し『高潮』を主宰。徳田秋声らと交流。明治45年に飛騨を訪れて魅せられた大羽は、大正2年に高山へ転居。飛騨史談会創立者の一人となり『飛騨史壇』の編集を担当。地元の俳句結社の指導などを行い、飛騨の文化に広く貢献。



小峰大羽碑「夏草に一路あり登山口と知る」
飛騨東照宮境内

高山市文化協会では、郷土の文化を高めた文学者の経歴と功績を紹介し、高山の文学の発展に寄与する目的で、「近代文学館企画展」を定期的に開催しています。今回は、近代と現代の俳句を展示し、その作品から、現在に至る俳句の背景や変遷をご覧ください。

近代の俳人として小峰大羽氏、現代の俳人として小島幸男氏を取り上げ、ご紹介いたします。当協会では昨年、小峰大羽氏のご遺族から多数の資料を寄贈いただき、調査・研究を進めてまいりました。今回の企画展では、これらの資料も初公開いたします。ぜひ、高山市図書館「煥章館」まで足をお運びください。

令和5年3月25日[土]・26日[日]

時間 25日(土)午前10時～午後5時 / 26日(日)午前10時～午後4時

高山市図書館「煥章館」 入場 無料

1階生涯学習ホール 高山市馬場町2-115 (tel.0577-32-3096)

主催 一般社団法人高山市文化協会 共催 高山市

●お問い合わせ先 一般社団法人高山市文化協会 (tel.0577-34-6550)

※ご来場の際は、マスク着用にご協力ください。

第一章 小峰 大羽（こみね たいう）

明治六年（一八七三）二月十五日～昭和二十年（一九四五）五月二十四日

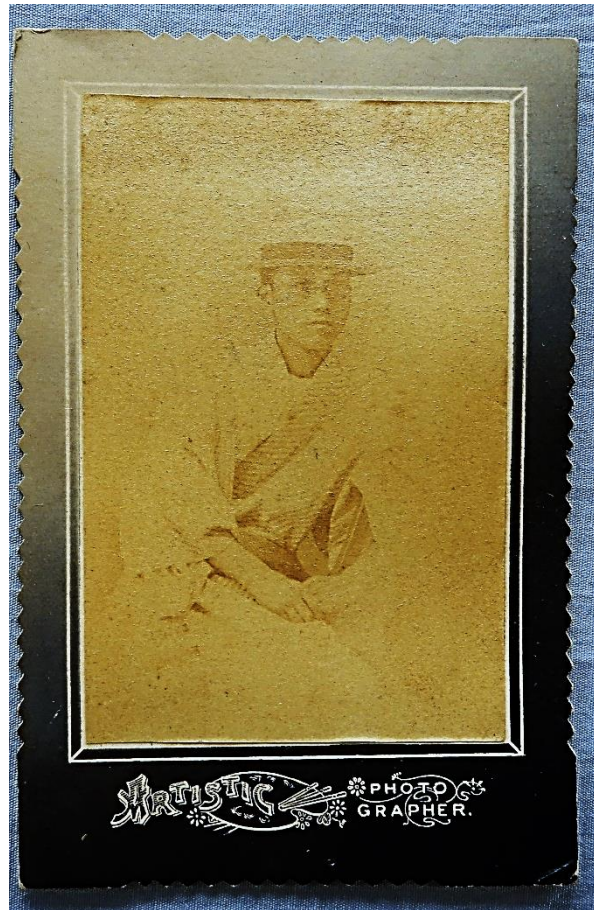
俳人。画家・郷土史家。東京神田生まれ。名は邦寿。号を大羽楼大羽。

東京府立毛筆画伝習所卒。文学を尾崎紅葉、画を狩野洞谷に学ぶ。富岡永洗の藻斎画塾の客員、『風俗画報』を始め新聞、雑誌の挿絵を手掛けるなどした。俳句では二十五歳から新聞、雑誌の選者として活躍し『高潮』を主宰。徳田秋声らと交流。明治四十五年（一九一〇）に飛騨を訪れて魅せられた大羽は、大正二年（一九一三）に高山へ転居。飛騨史談会創立者の一人となり『飛騨史壇』の編集を担当。地元俳句結社の指導なども行い、飛騨の文化に広く貢献。昭和七年（一九三二）に名古屋へ転居。編著『俳句大観』『東京語字典』『蘭亭遺稿』。

【飛騨人物事典】



第1節 写真
一、小峰大羽肖像写真

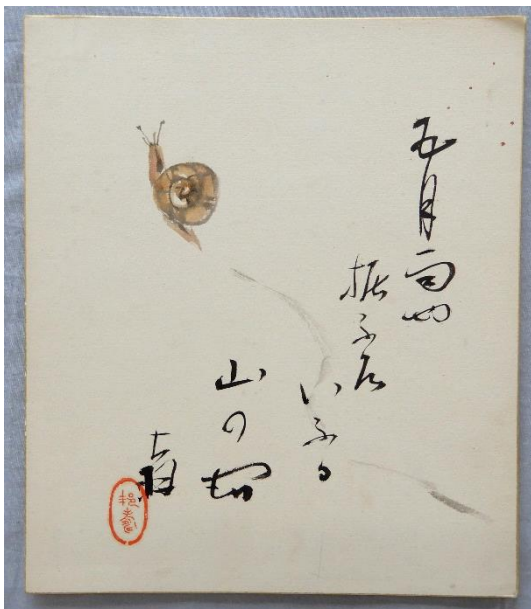


第2節 俳画
二、俳画「寒梅のつぼみかたきに魚板鳴る」



絵「水仙」

三、俳画「五月雨や据風呂いぶる山の宿」



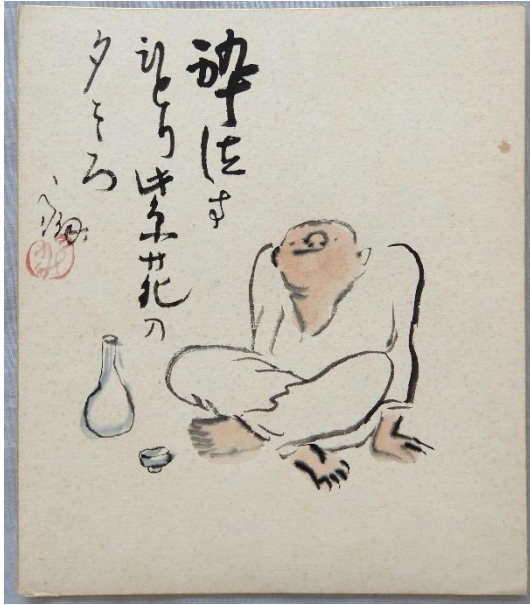
絵「蝸牛」

四、俳画「ぬるむ水家鴨なきたてゝ濁らせり」



絵「ツツジ」

五、俳画「酔ひ泣きすひとり紫苑の夕ころ」



絵「人物」

六、俳画「松風や木地のろぶちに氣の澄める」



絵「椿」

七、俳画「下がりのすゞしき露に鎌握る」



絵「ささゆり」

八、俳画「風ののしりて北窓ふさぐ記を草す」



絵「梅」

九、俳画「ころもかへてこの頃の鯉のふとり見る」



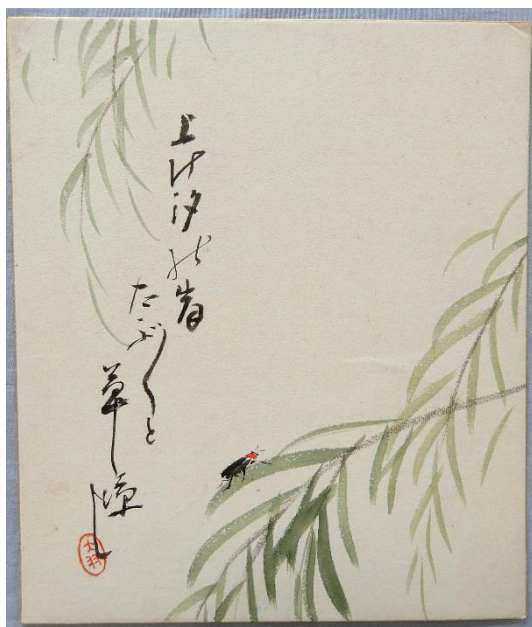
絵「緑の葉」

十、俳画「露にぬれて大またに草ふみ行く」



絵「蓮の葉」

十一、俳画「上げ汐の岸たぶたと草涼し」



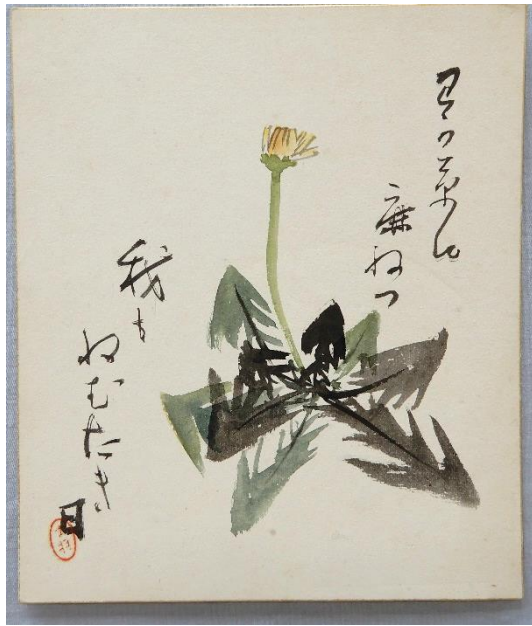
絵「柳に蜩」

十二、俳画「螢行くやぼつぼつ顔にあたる雨」



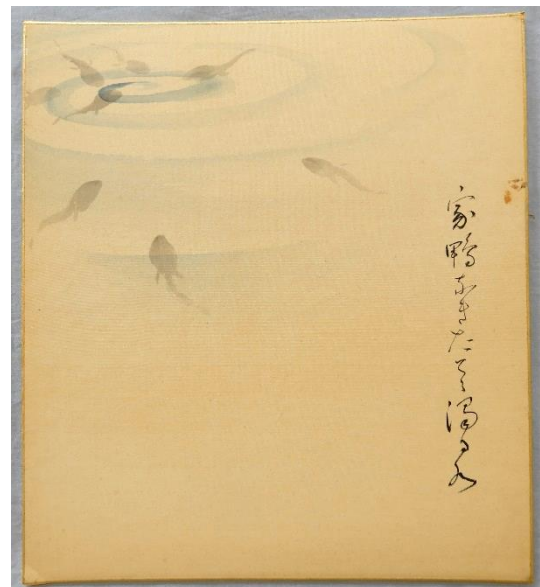
絵「川」

十三、俳画「わか草に鹿ねつ我もねむたき日」



絵「蒲公英」

十四、俳画「家鴨なきたてゝ濁る水」



絵「おたまじゃくし」

十五、俳画「あかとき漁村やすらに」



絵「鶴」

十六、俳画「短日の絵具乾かず筆を擱く」



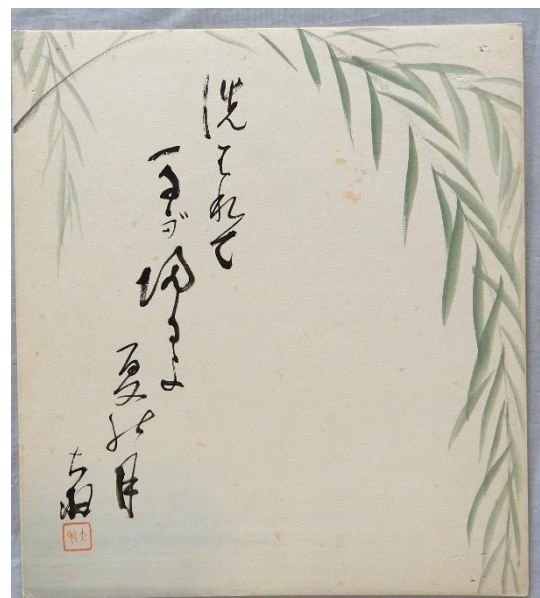
絵「椿」

十七、俳画「曙によき正月や漁夫が歌」



絵「海辺船」

十八、俳画「洗はれて馬が帰るよ夏の月」



絵「柳の枝」

十九、俳画「初日影なみのうねりに乗せて来る」



絵「松」

二十、俳画「白ざけの酔かるく児と遊びけり」



絵「梅香合」

二十一、俳画「梅の老木まどにかけして静なり」



絵「俳人」

二十二、俳画「この海戦果ことほぐ大初日」



絵「日の出」

第3節 俳句

一、句入会席膳「二夕寛おち合へり芹等閑に」



二、句入会席膳「柊のとがり葉に月の庭凍つる」



三、句入会席膳「杵音に忘年会の髭を剃る」



四、句入会席膳「露にぬれて大またに草踏み行く」



五、句入会席膳「縁そこら水にして金魚掴み居り」



六、句入会席膳「赤とんぼ次ぎつぎに畦まめをひく」



七、句入会席膳「雪の陽をうけてまぶしくわかなつむ」



八、句入会席膳「向ふやま雉子なけり川手水する」



九、句入会席膳「板やねのそりかれ柳の影つくる」



十、句入会席膳「夏草に一路あり登山くちと知る」



同句が飛騨東照宮「小峰大羽碑」の碑文となっている

十一、句入銘々皿「山の気にはつきり目さむ今朝の秋」



十二、句入銘々皿「夜冷ます瀬音に河鹿まきれなく」



十三、句入銘々皿「山深く秋の気津のる笠のぬれ」



十四、句入銘々皿「土用山入道雲を背に光る」



十五、句入銘々皿「川音の雨音に似て夜の秋」



十六、句入銘々皿「音あれば響き反すや峽の秋」



十七、句入銘々皿「黍に残る陽にかなかなの川へひゞき」



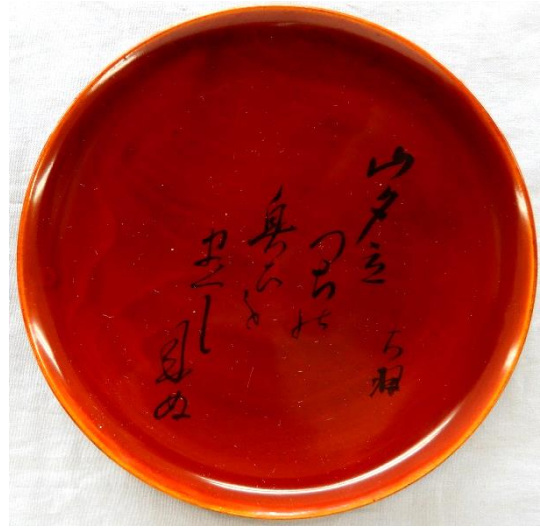
十八、句入銘々皿「夜の更けて踊寒むかる山の冷」



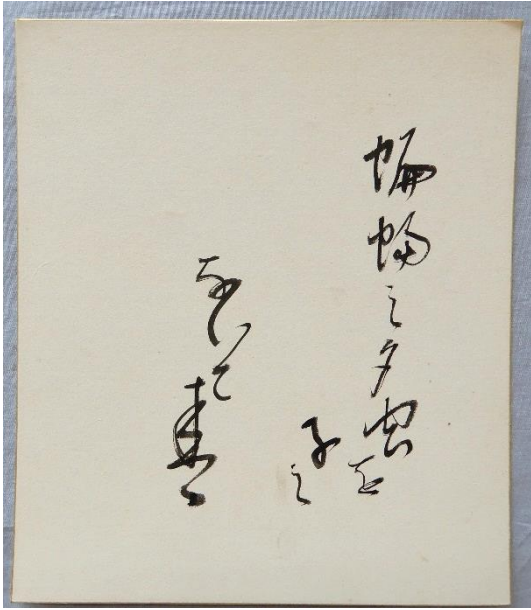
十九、句入銘々皿「朴の葉の大きくゆれて霧なかる」



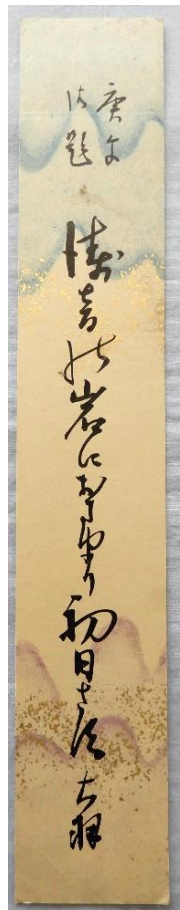
二十、句入銘々皿「山夕立土の臭ひをまくし来ぬ」



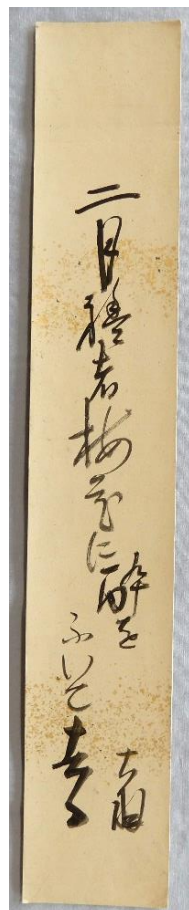
二十一、色紙「蝙蝠の夕空を子のないて来る」



二十二、短冊「涛音の岩におさまり初日さす」



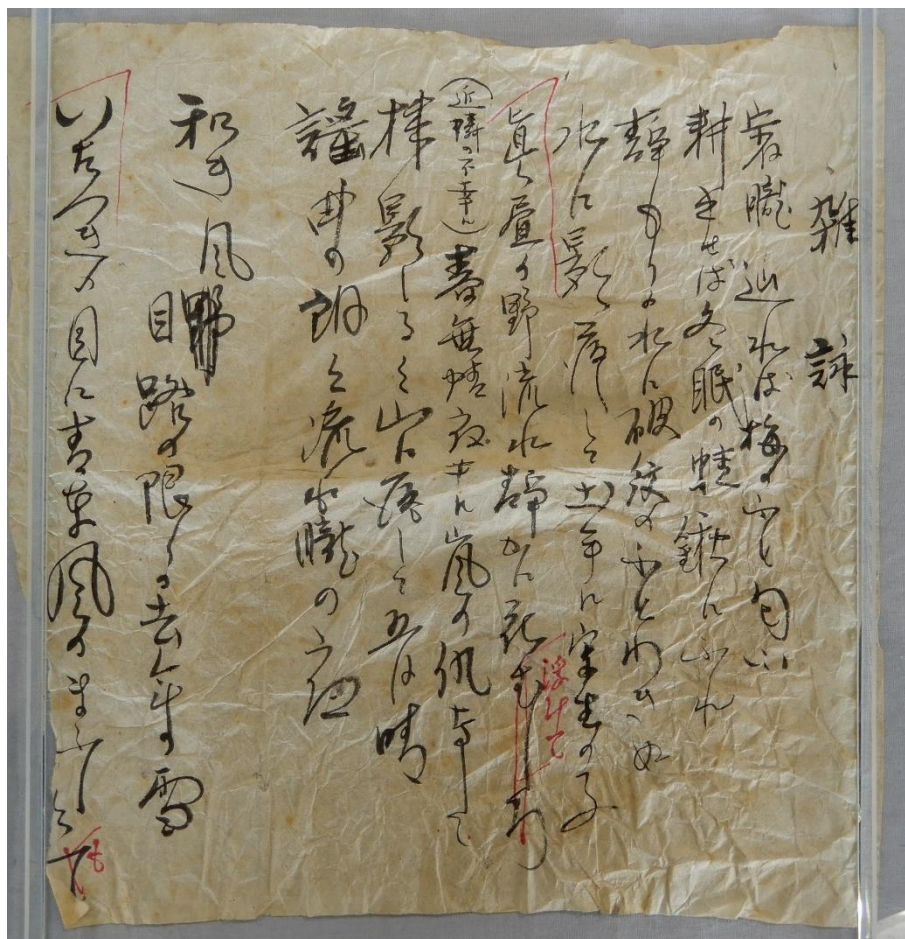
二十三、短冊「二月禮者梅花に酔をふいて去る」



二十四、短冊「掃苔の石冷に花を」



二十五、 雑詠「賓龍辿れば梅がふと匂ふ」他



二十六、 「劬俳句」七月号

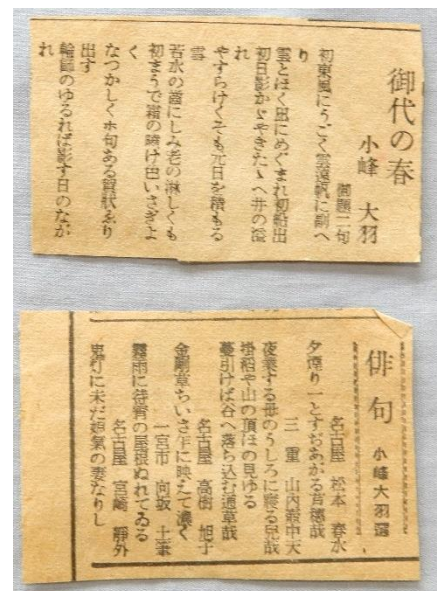


二十七、俳句大観「秋」

(星野麦人・小峰大羽編 明治三十五年九月)

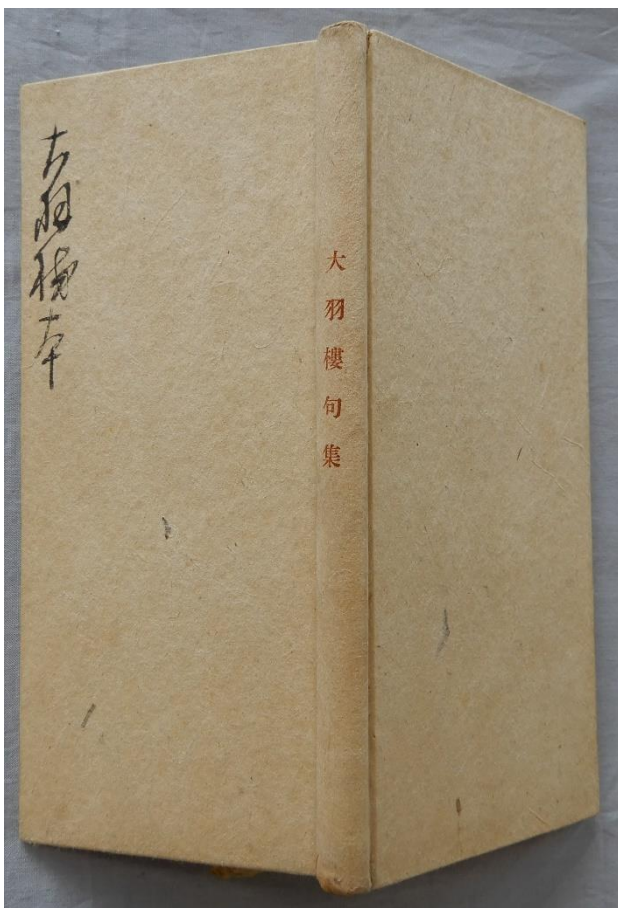


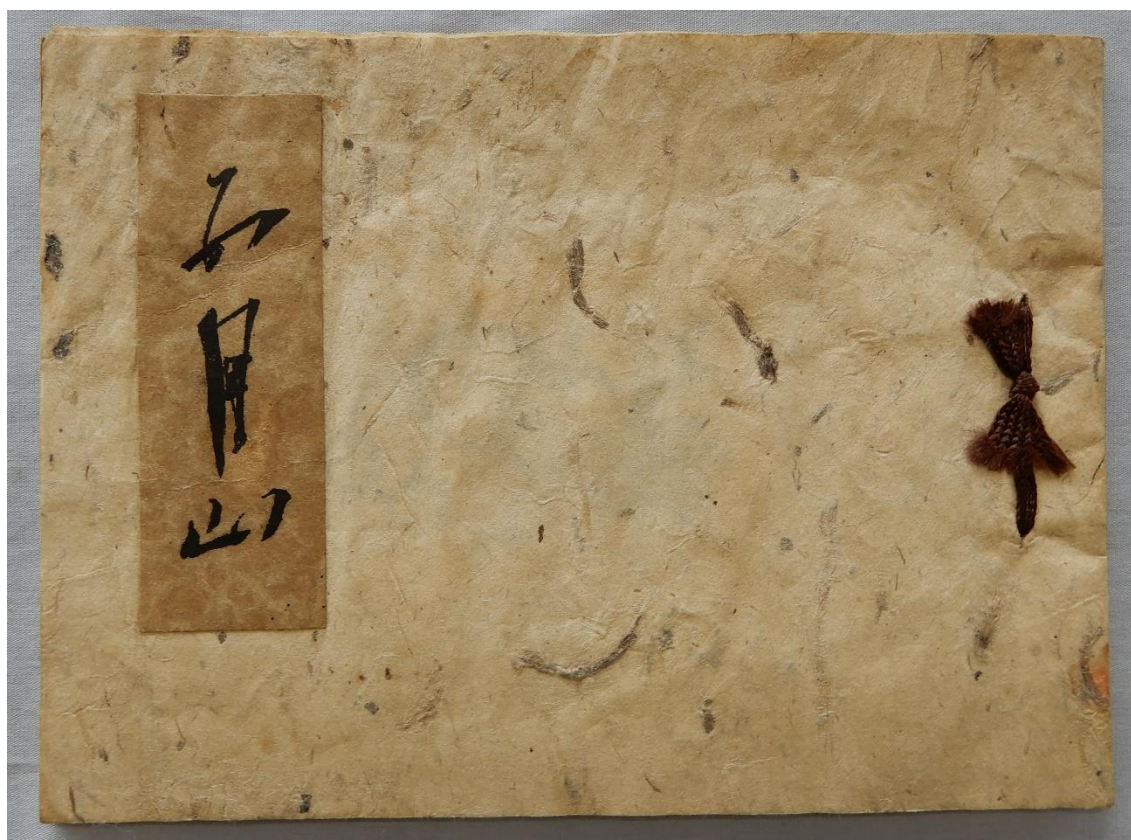
二十八、新聞記事—小峰大羽俳句



二十九、「大羽樓句集」

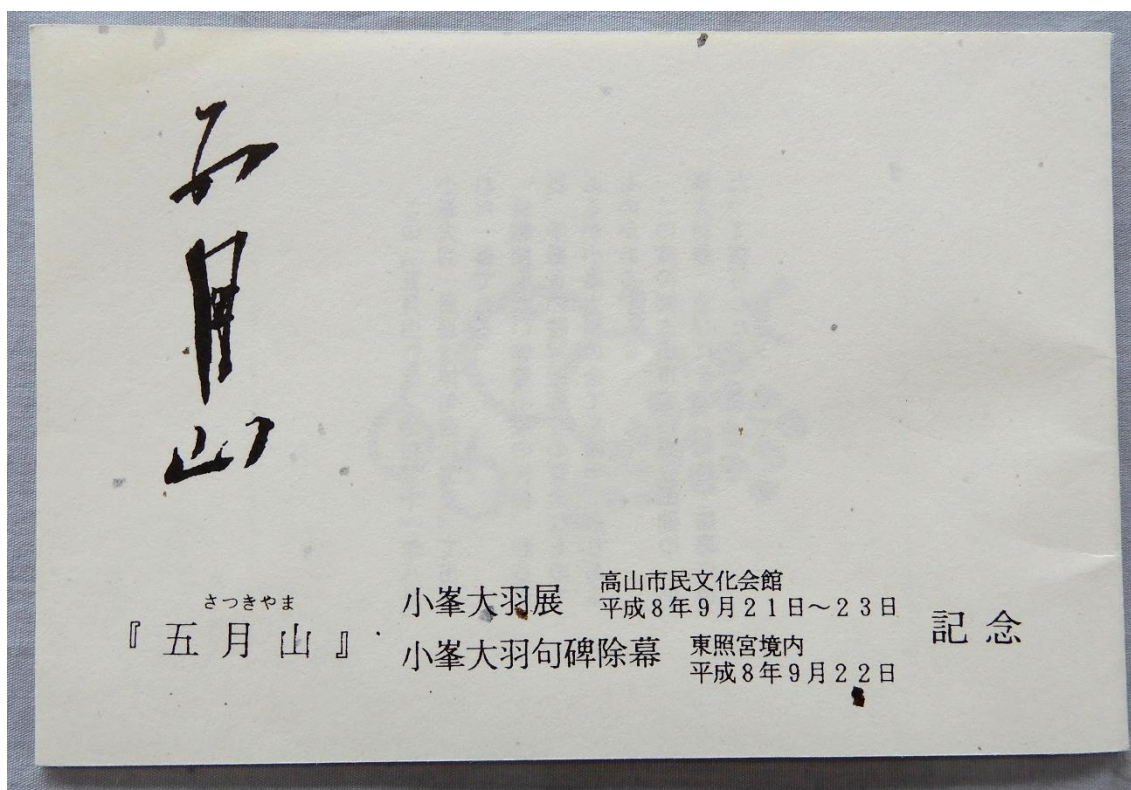
(画賛展覧会記念出版 昭和十四年五月)





三十、「五月山」

(小峰大羽没一周忌記念 昭和二十一年八月二十四日発行発行)



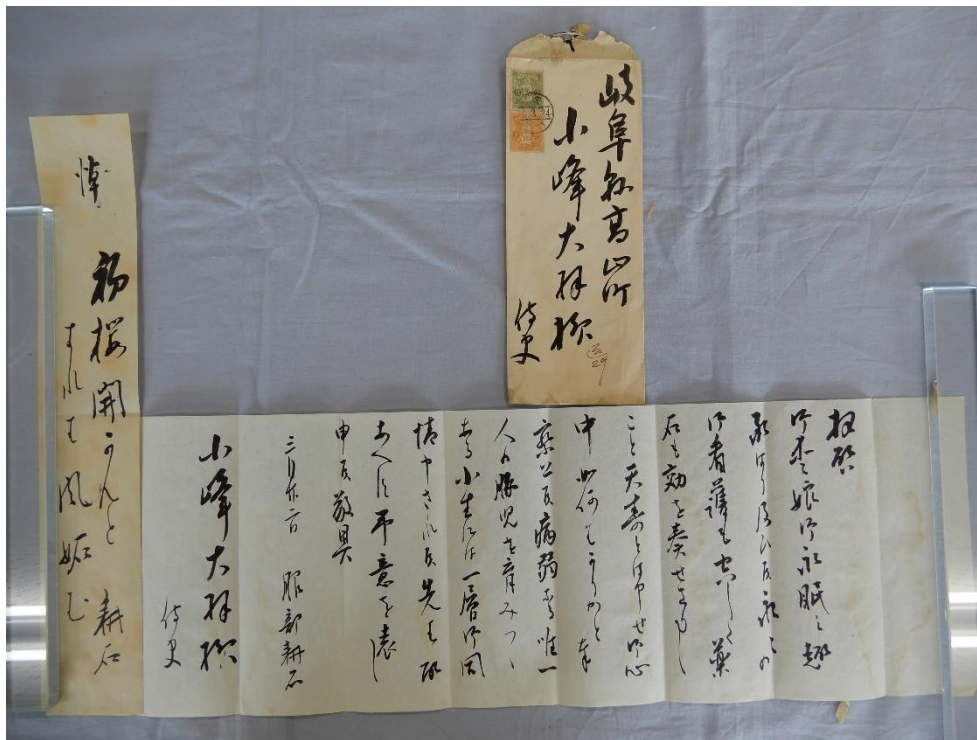
三十一、「五月山」〔復刻版〕

(小峰大羽句碑除幕・小峰大羽展記念配布 平成八年九月二十二日)

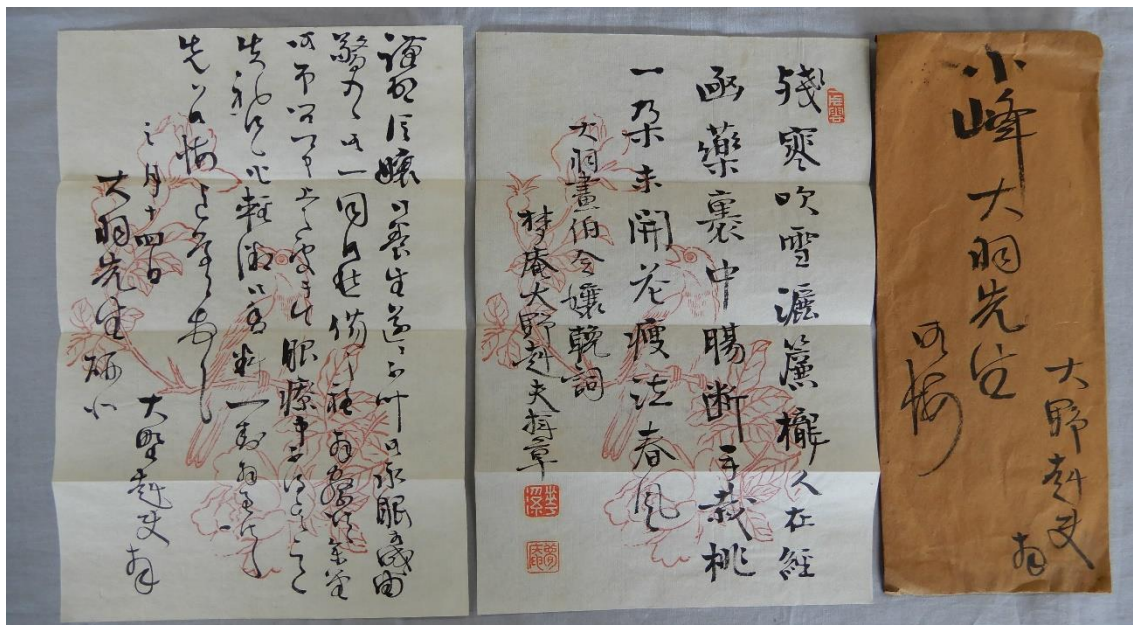
さつきやま
『五月山』
小峰大羽展 高山市民文化会館 平成8年9月21日～23日
小峰大羽句碑除幕 東照宮境内 平成8年9月22日
記念

第4節 その他資料

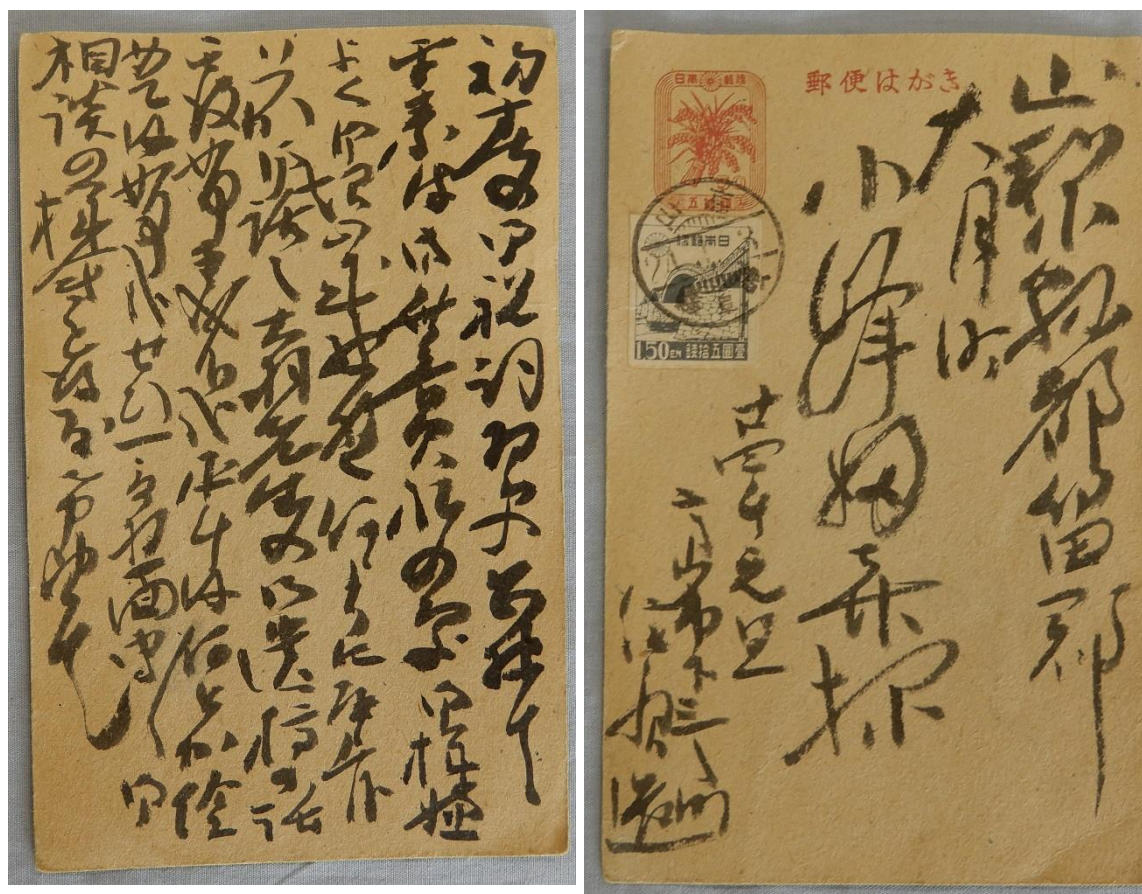
一、封書 東京市服部耕石氏より、小峰大羽様宛
(三月二十二日 短冊同封)



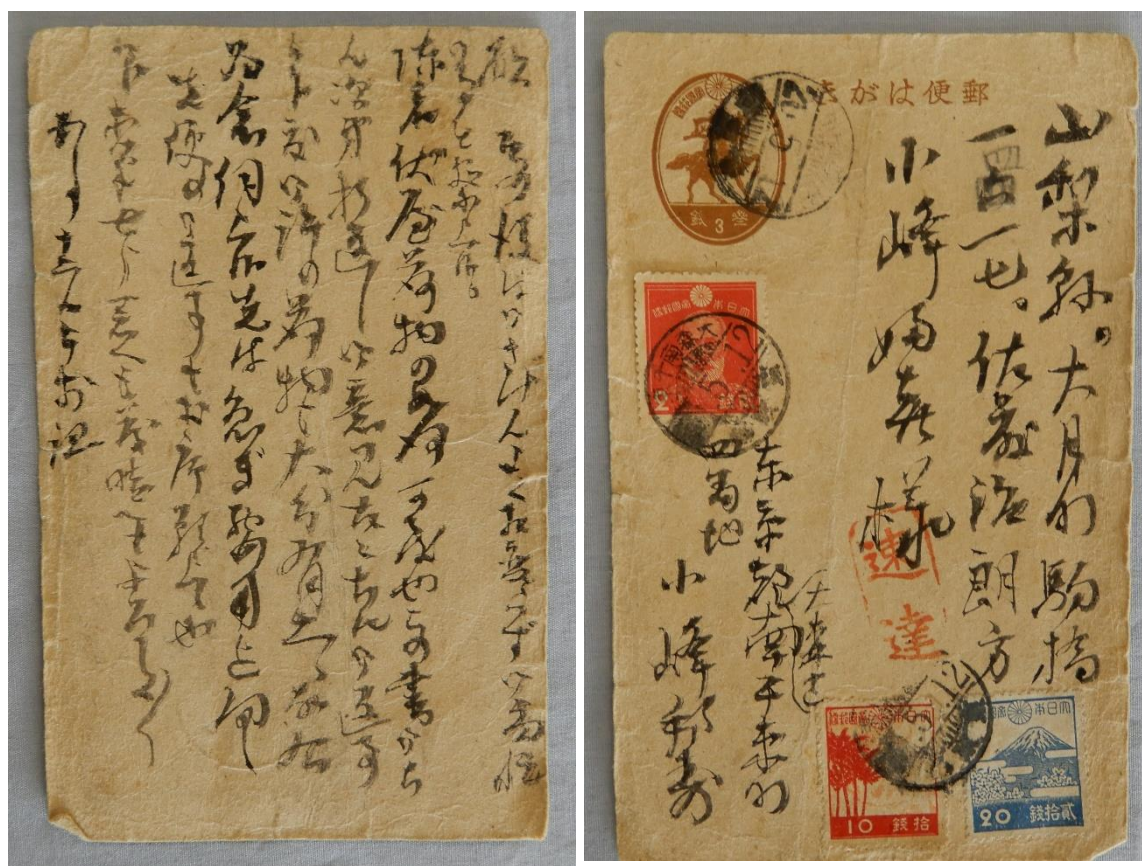
二、封書 大野越史押 大羽先生
(三月十四日)



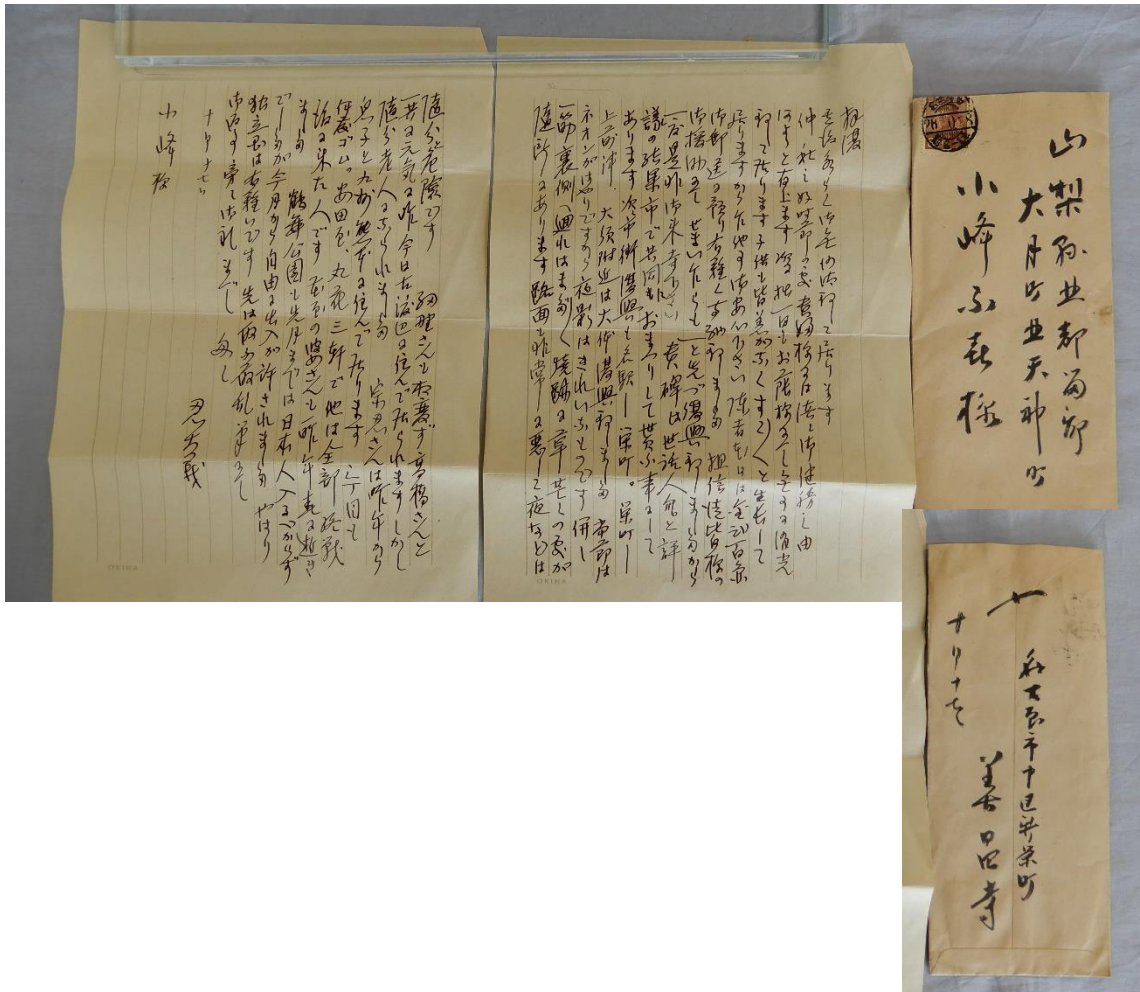
三、葉書 住廣造氏より、小峰婦喜様宛



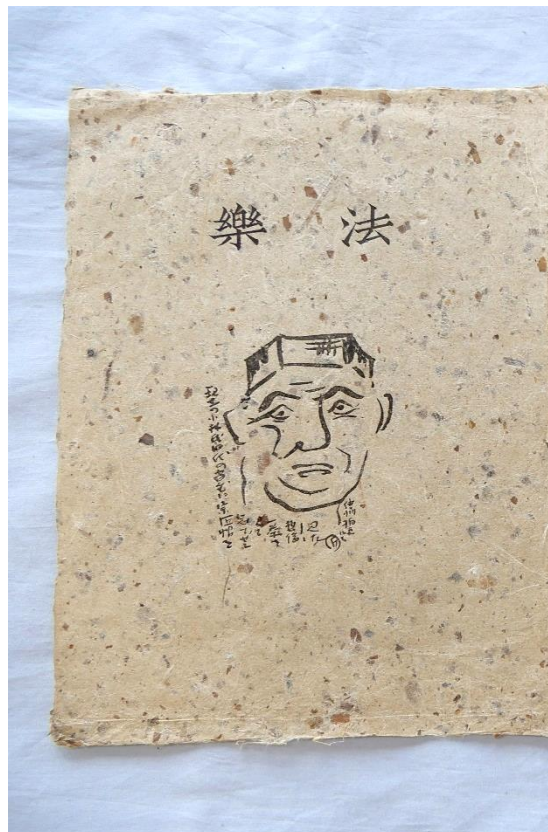
四、葉書 小峰邦寿(大羽)より、小峰婦喜様宛

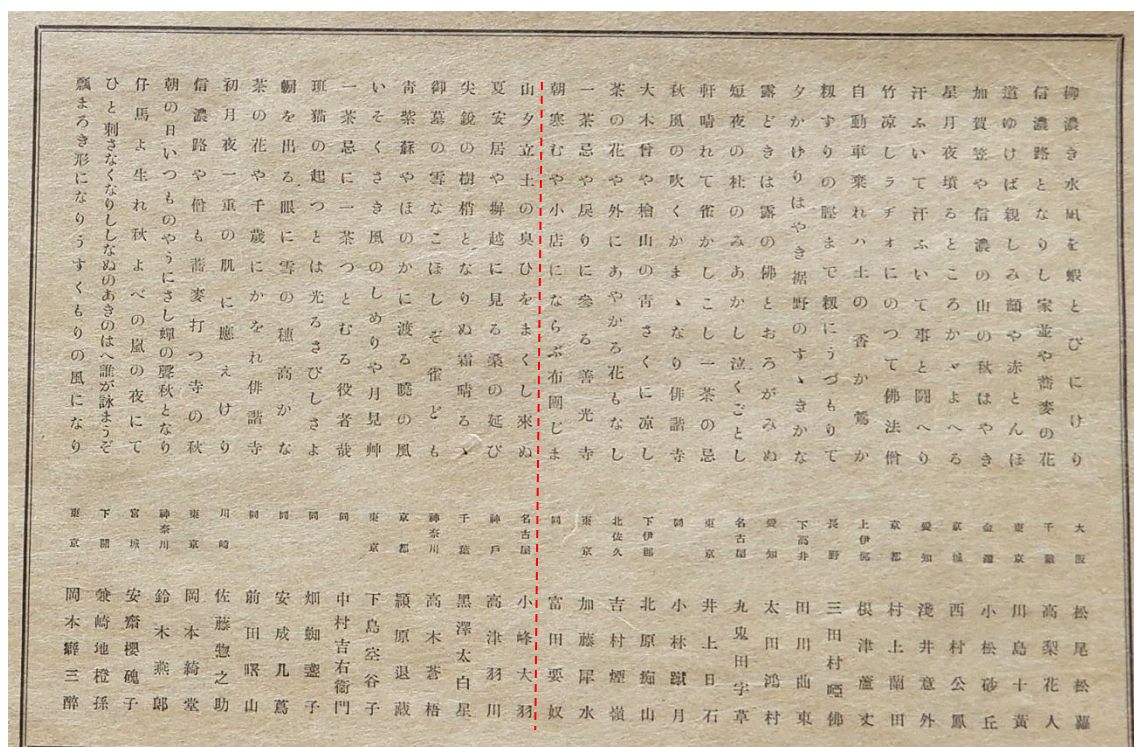
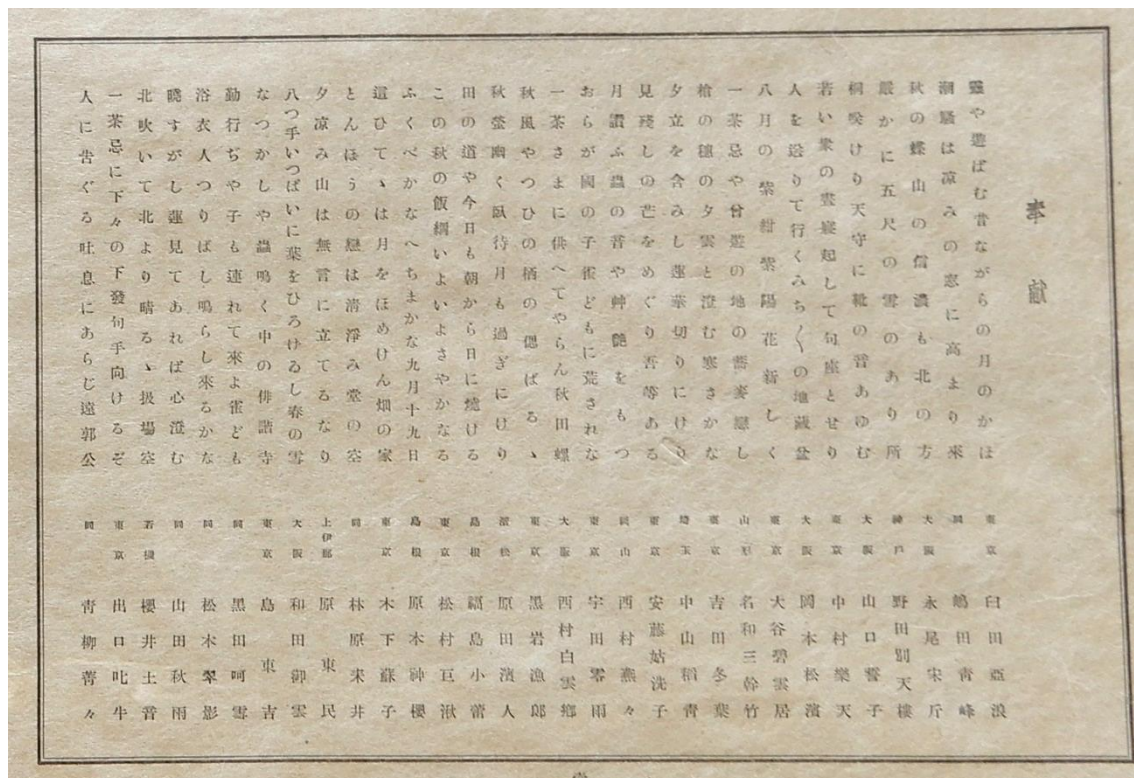


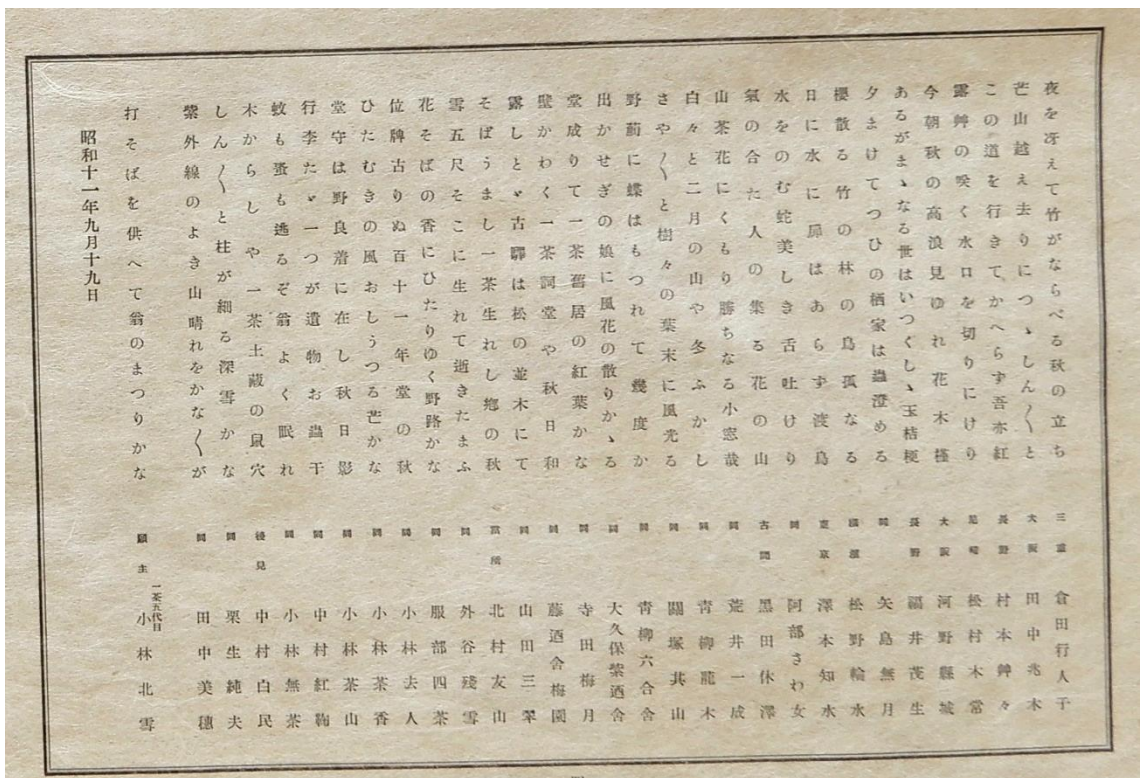
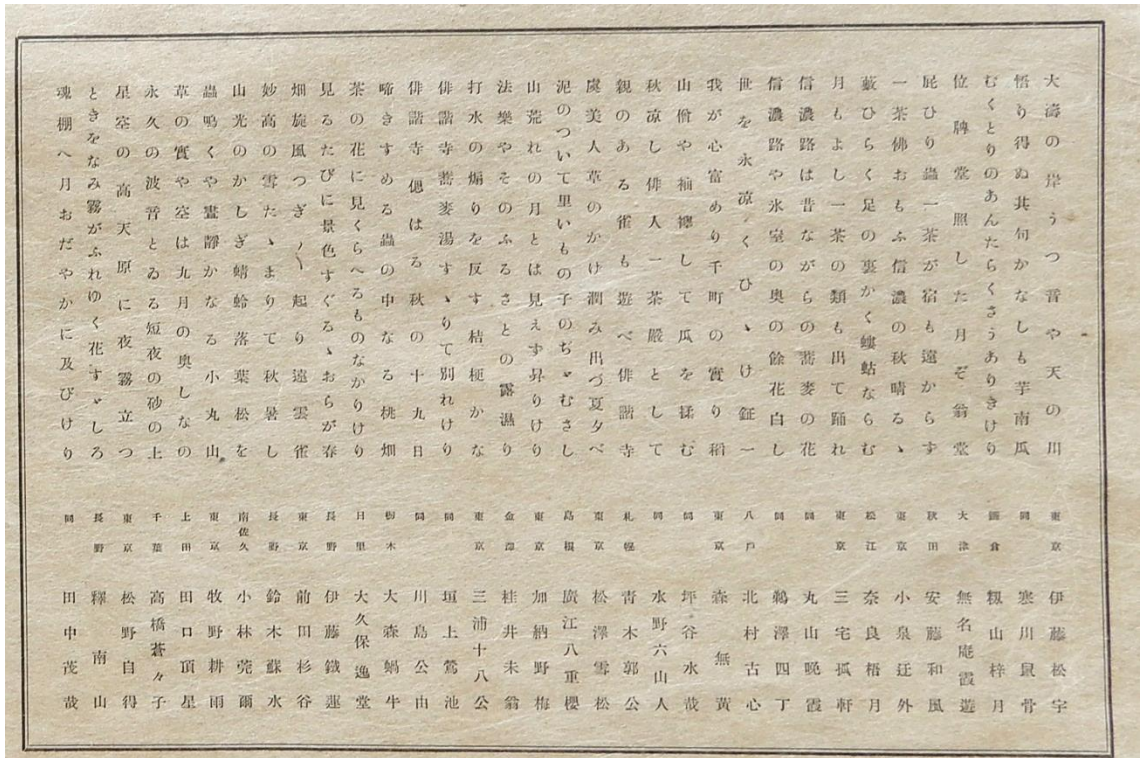
五、封書 名古屋市善昌寺より、小峰婦喜宛

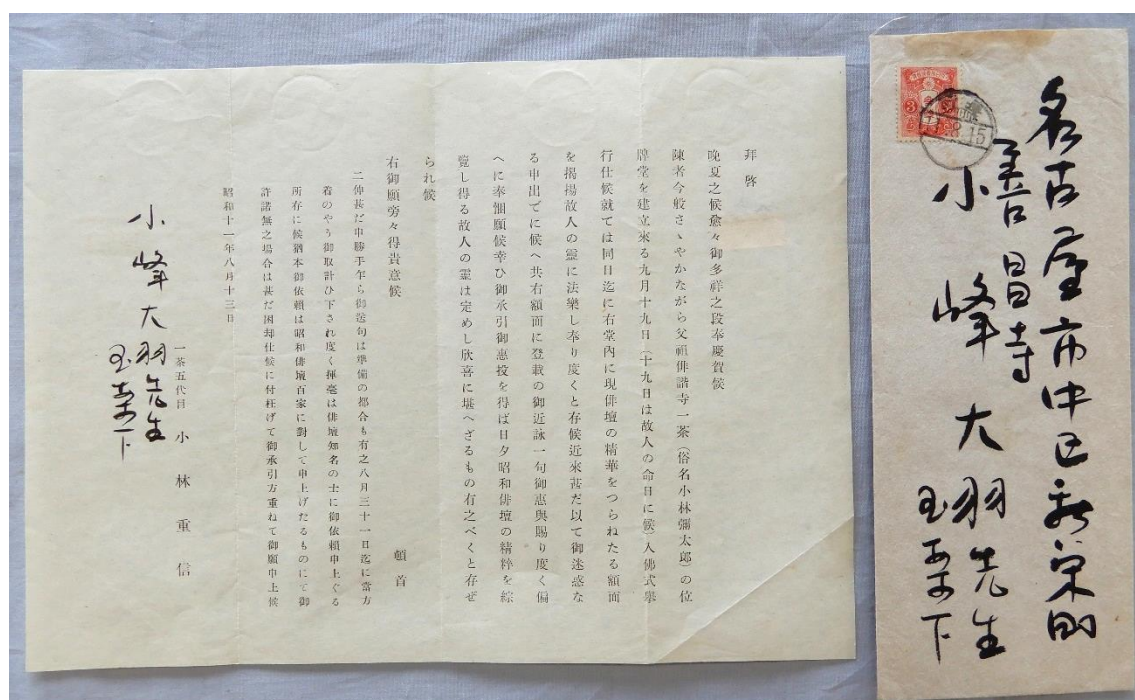
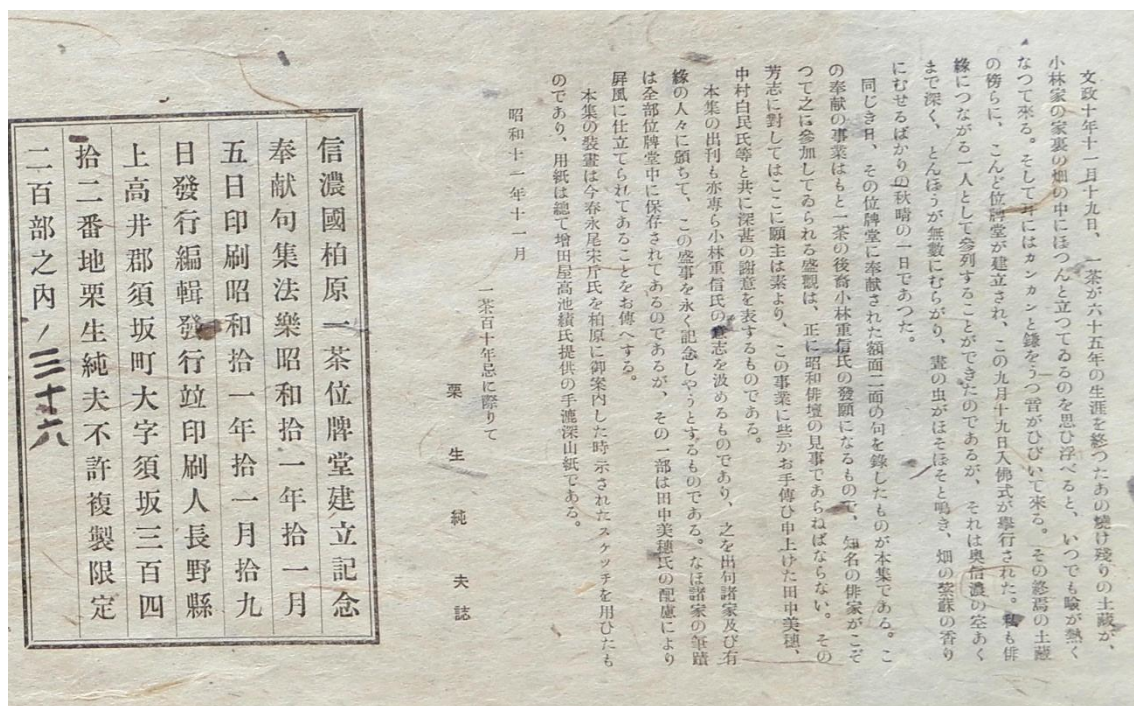


六、「法樂」——小林一茶位牌堂建立奉献句一覽
(五枚入り 昭和十年十一月十九日)









八、「飛驒俳人史」―小峰大羽 日下部宵三記

(高山市民時報 昭和五十六年九月十三日付)

の記録 洋子さんの8年間 井端望子 花房望子

飛驒俳人史

小峰大羽

日下部宵三

小峰大羽と飛驒とのかわり合いは、明治四十五年一家を挙げて高山に移り住んだ時に始まる。その少し前に一度飛驒を訪ねたことがあり、その折「夏草に一路あり登山口と知る」の句を作っているが、このときの飛驒の風土・人情に魅せられて、高山を安住の地としたのであるが、それから二十数年間高山に在住して飛驒の俳壇・史壇に大きな足跡を残した。

大羽は明治六年東京に生まれた。本名邦寿、長じて大羽楼大羽と号した。若くして文学は尾崎紅葉に、俳句は徳田秋声、内藤鳴雪らと共に「秋声会」の創立に参加し、画を狩野洞谷に学んだ。

た。この間、『蘭亭遺稿』の大編著を成し遂げた。『蘭亭遺稿』は、蘭亭加藤歩簫の遺稿『紙魚のやどり』と歩簫の遺句集の二冊からなる大冊であり、歩簫の裔加藤千歩(専一)の企画発刊によるものである。後に、本書は天覧の光栄に浴した。

また大羽は、飛驒の俳壇が旧套的で遊びに堕していることを嘆き、中央俳壇との俳交を繁しくしながら、その刷新に努めた。現任の「やまずみ会」は、大羽の俳志を尊しとする人たちが大羽を中心に創まったとも伝えられている。

大羽は、その後、郡上八幡・岐阜・名古屋を経て生まれ故郷の東京に戻ったが昭和二十年五月二十四日の東京大空襲の折、狭心症の発作で亡くなった。

風ありて端午の空を仰がるる

大羽

九、「小峰大羽」俳句集発刊の同意書

(大羽先生後援会より)

推薦者

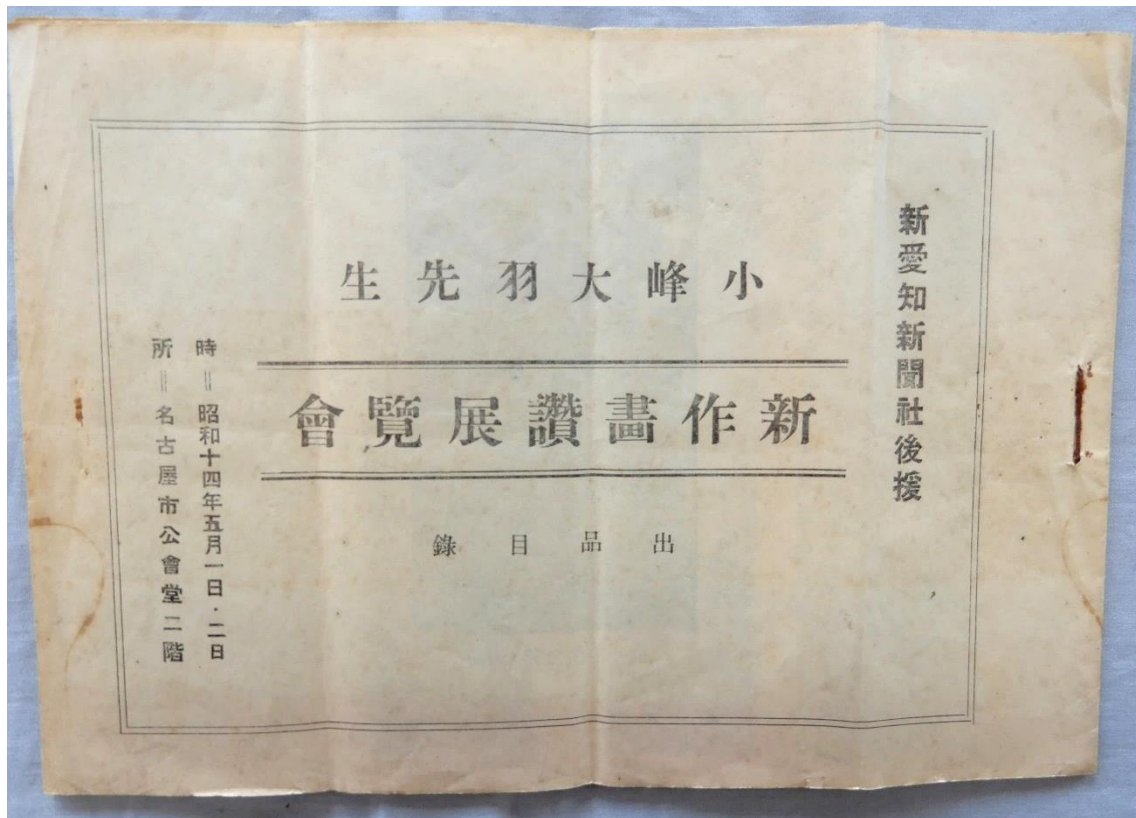
石田元季	飯野逸平	堀尾茂助
堤家玄川	富田孝吉	富田孝雄
岡谷應助	岡田良在衛門	加藤勝太郎
神田純一	神野金之助	横山啓太郎
高松定一	田中 齊	武市雄國
恒川 純一	中 谷 秀	都須市太郎
大岩 勇夫	大隈 榮一	大須賀源次郎
山田平十郎	八木源文吾	古嶋 安二
藤岡兵一	近藤博通	小尾悦太郎
遠藤柳作	青木鏡太郎	青木英作
林田直一	北村 一 郎	菊地信二
柳原真一	三浦 一 郎	宮部鈴三郎
御前生 清	森本金十郎	鈴木六造

昭和八年六月

大羽先生後援会

我ら東京の書物に於て又俳壇の巨匠たる小峰大羽先生が、我が国に於て俳句の歴史を探究する為め来日致されし機会に於て先生得た書に俳句の題詞を請ひて我が同好有志に頒せんと存候。先生が俳壇の大家として有名なることは曾て内藤鳴雪・角田竹冷・佐々木信・西田博士・笠原良三博士等と共に大日本俳壇講習会の講師に任じ又幾多の著作あり就中『俳句大観』『東京俳壇』等は最も俳壇の賞讃を請ひ近頃は又俳壇の「蘭亭遺稿」の大編著を完成して廣く文壇へ一大貢獻を爲したり俳書として畏くも天覧の榮に浴したるは本書を以て蓋し其の嚆矢と爲す是れ洵に先生の學識と識見と手胸と人格の致す所と信じ多大の敬意を表する次第に御座候。

今や歳暮新寒の好季節に於て爰に先生八神の筆を揮はる其の作品は畫と俳と俳と畫と渾然融和圓熟せる先生獨創の町畦にして悠遊の趣凡洒落なると氣韻の清高典雅なるとは已下天獨歩の定評あり今復た贅言を要せずと存候幸に此好評を達せず膏つて御賛同あらん事を切に希望致候 敬具

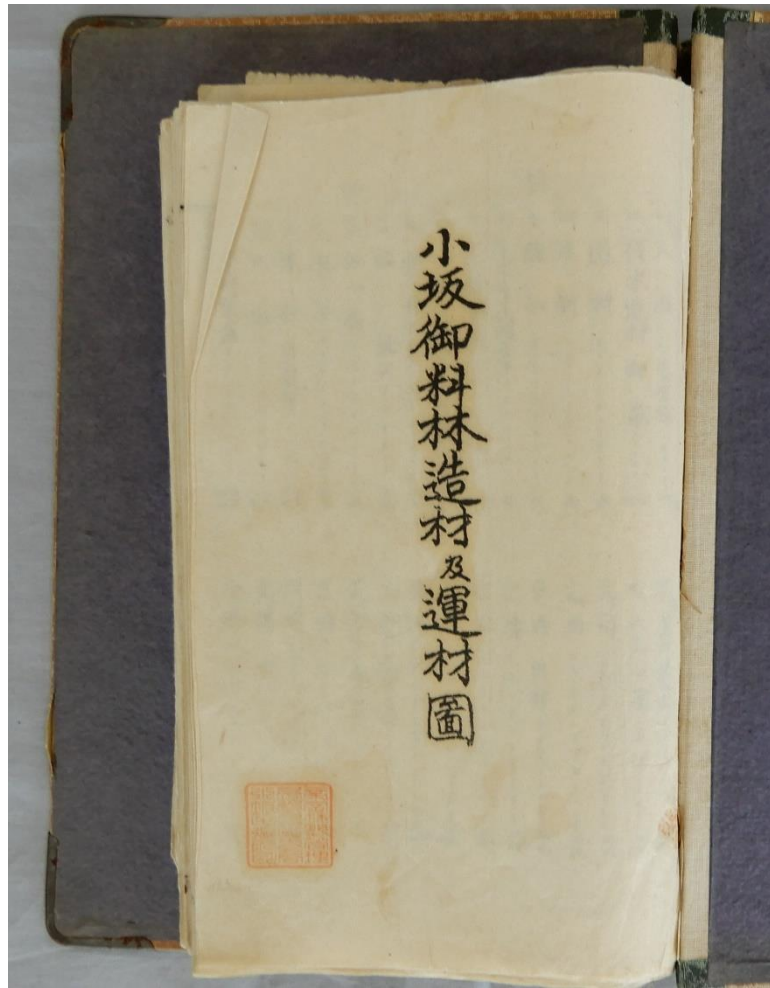


十、小峰大羽先生 新作画賛展覽會（名古屋市公会堂）
新愛知新聞社後援（昭和十四年五月一、二日）

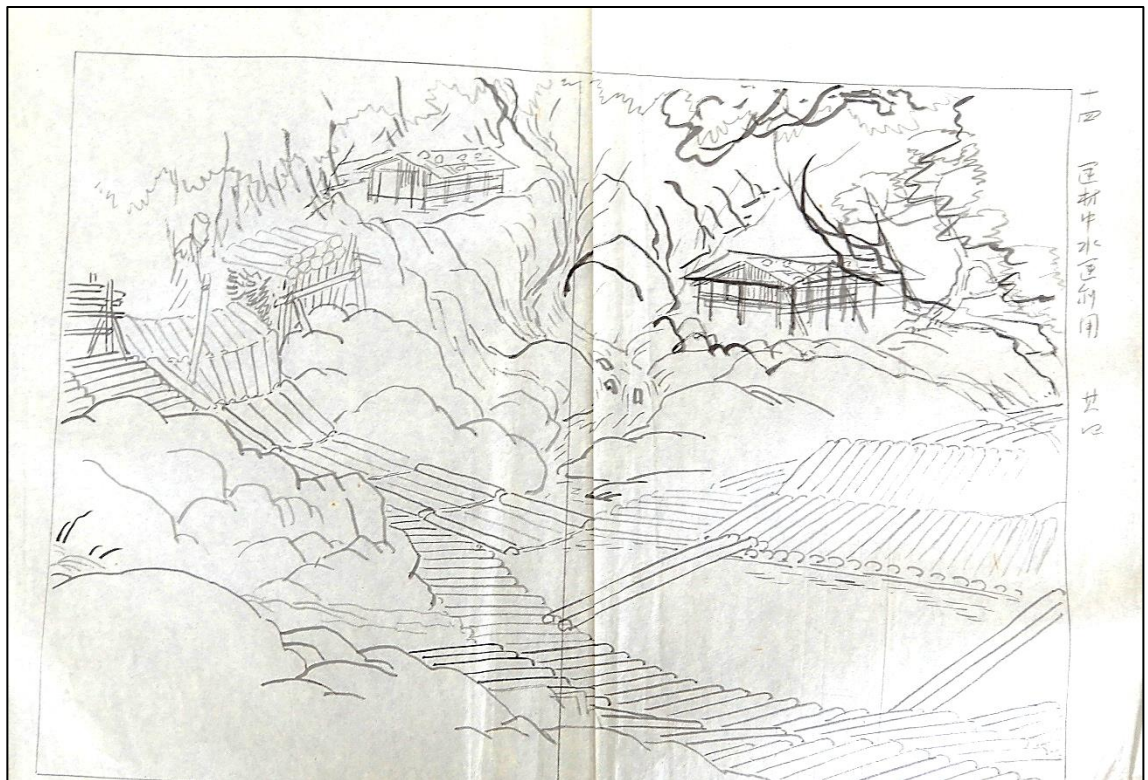
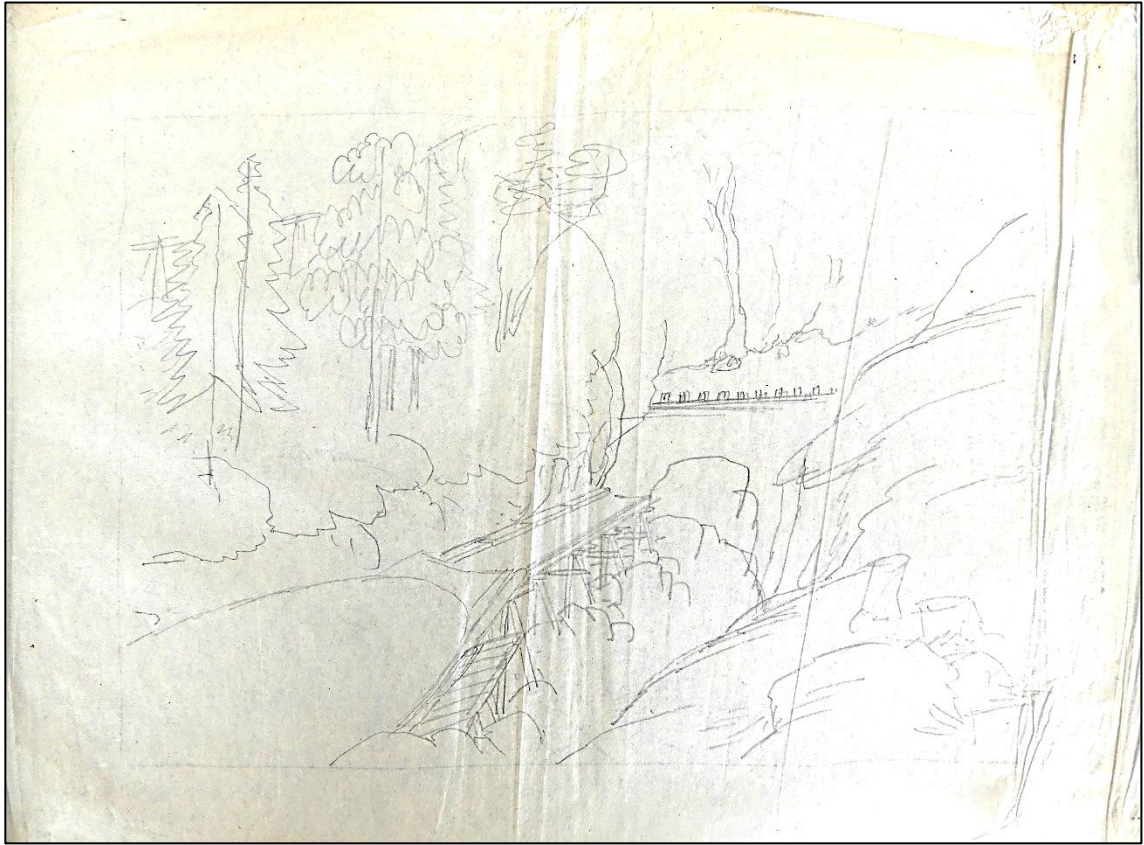
第5節 絵図・絵画

一、小坂御料林造材及運材図

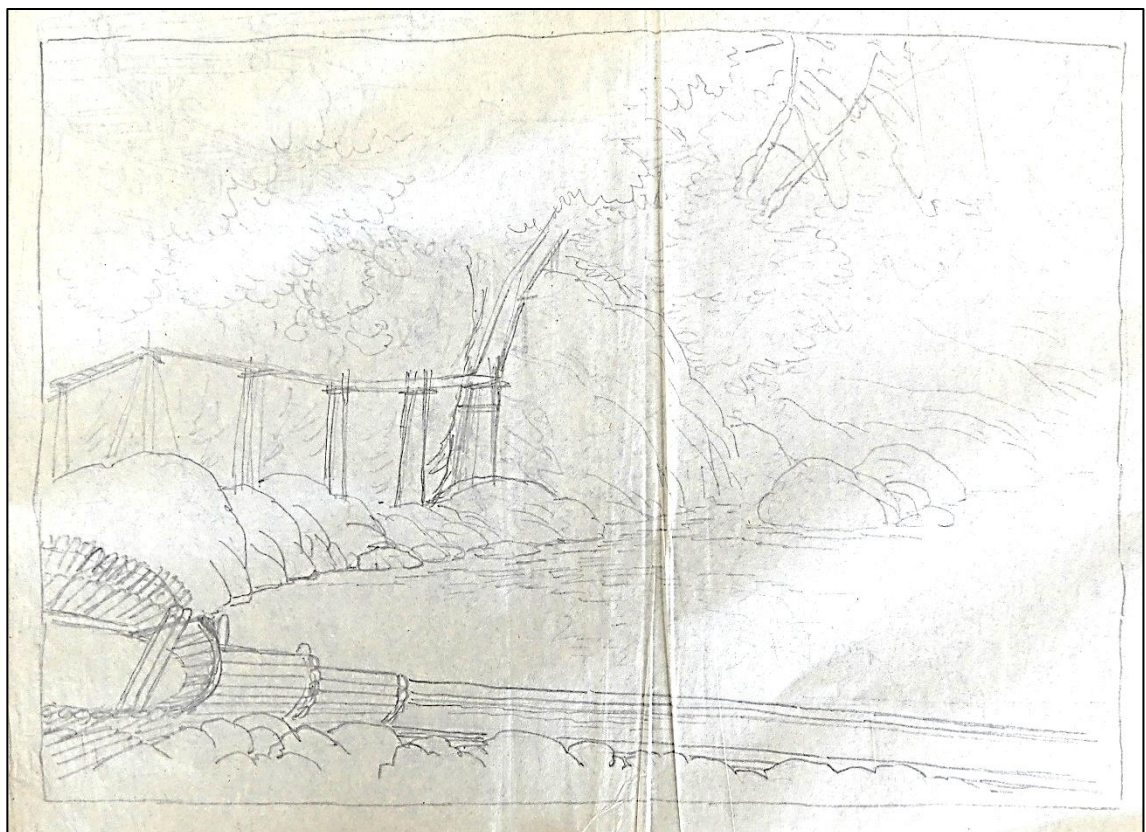
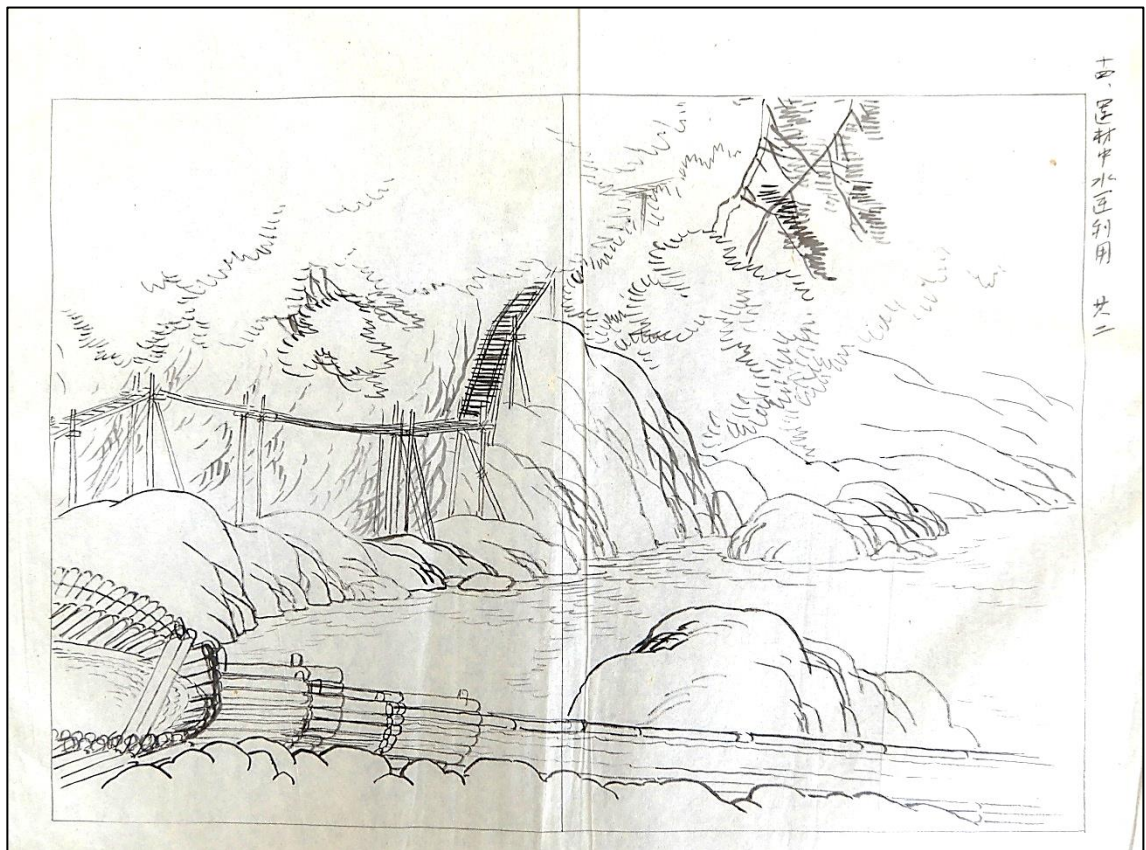
御料林伐採及運材(川流)図説明入り

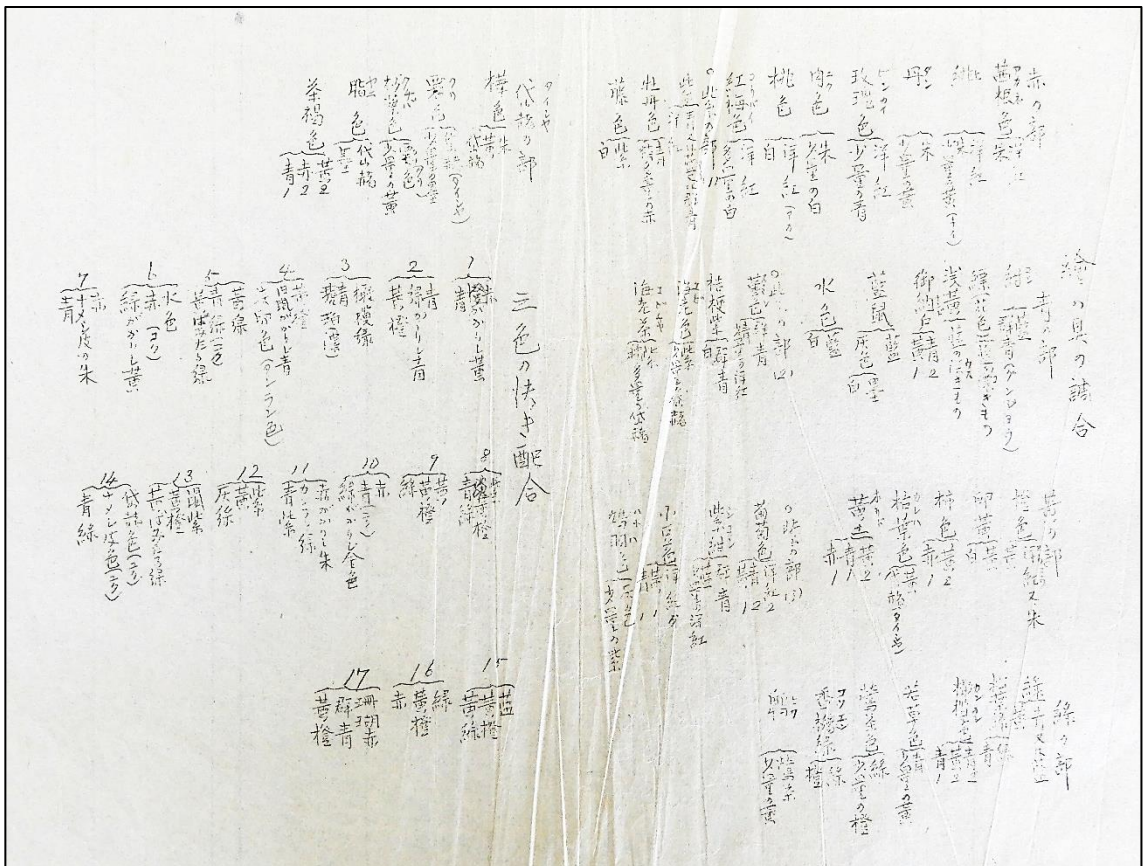
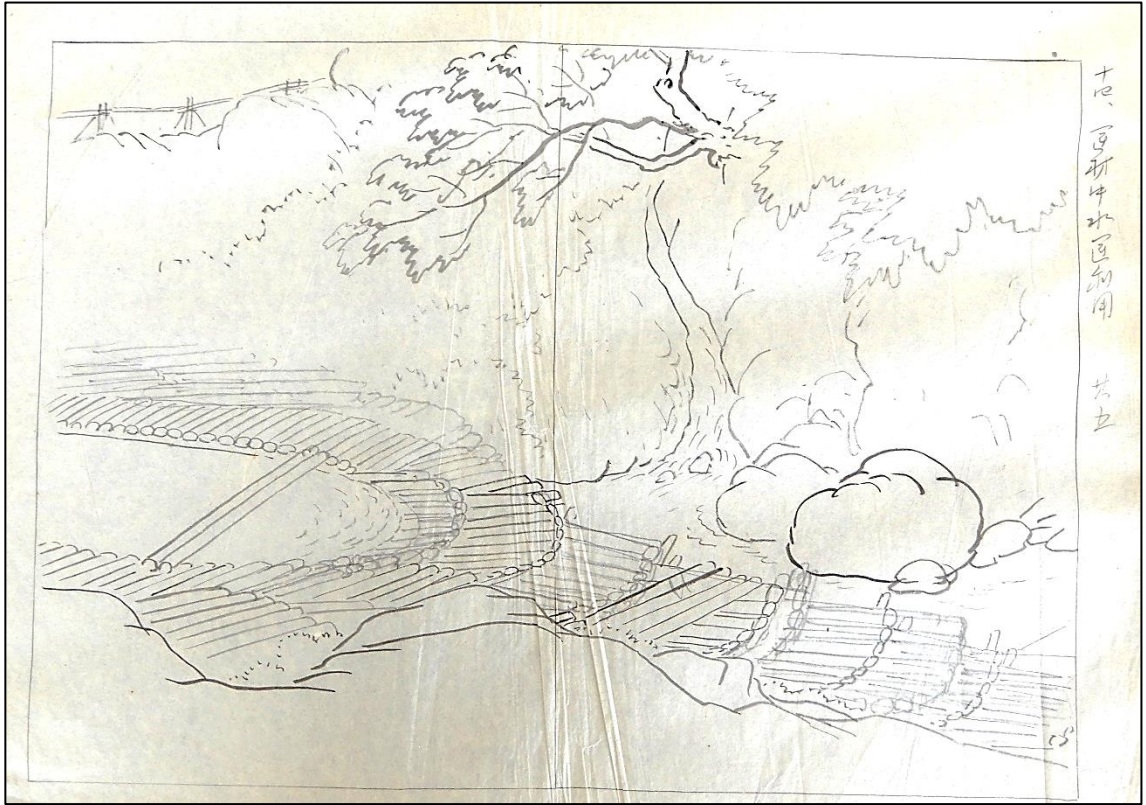


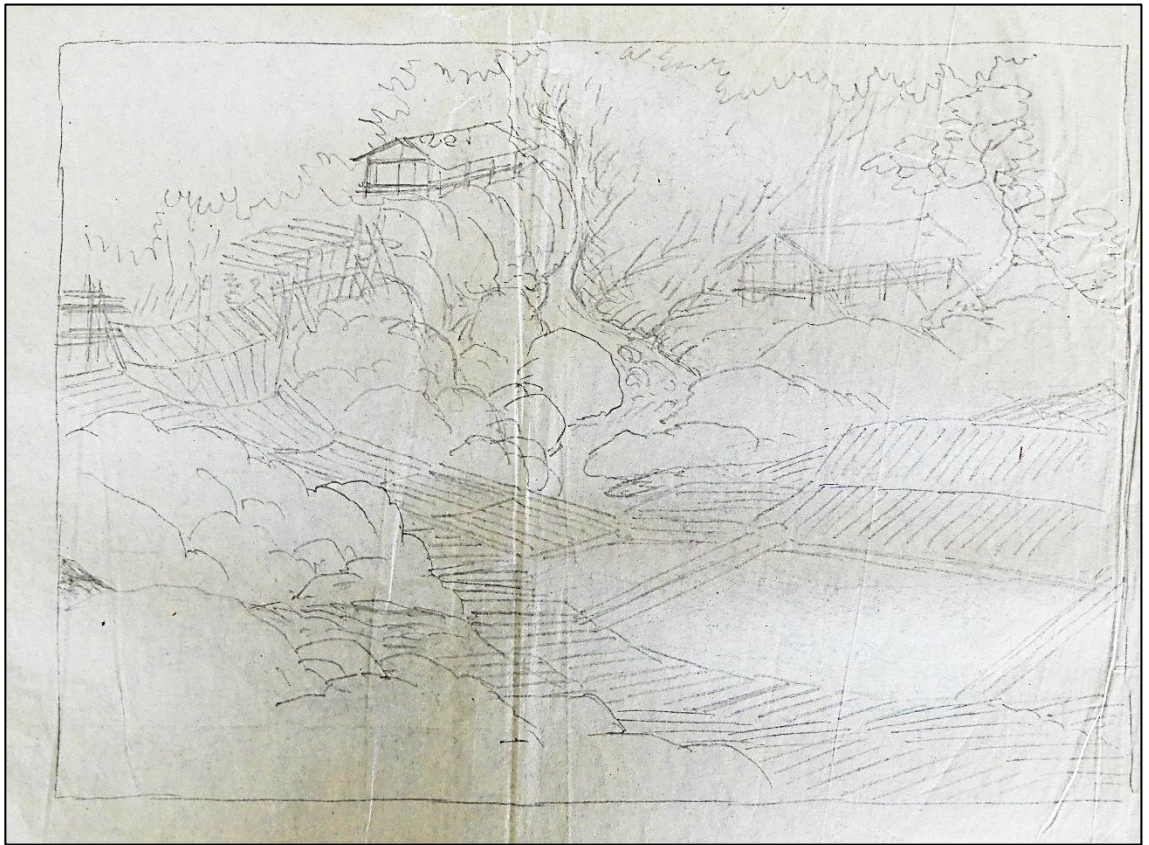
二、小坂御料林造材及運材図の下絵(鉛筆画)



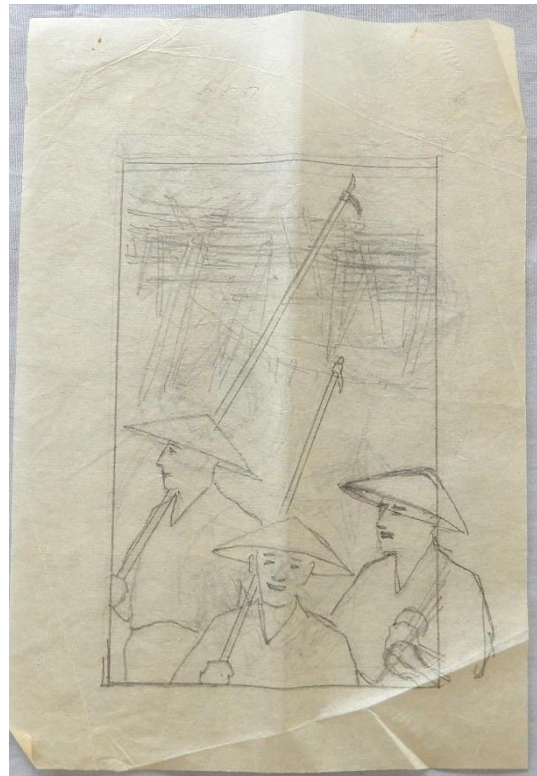
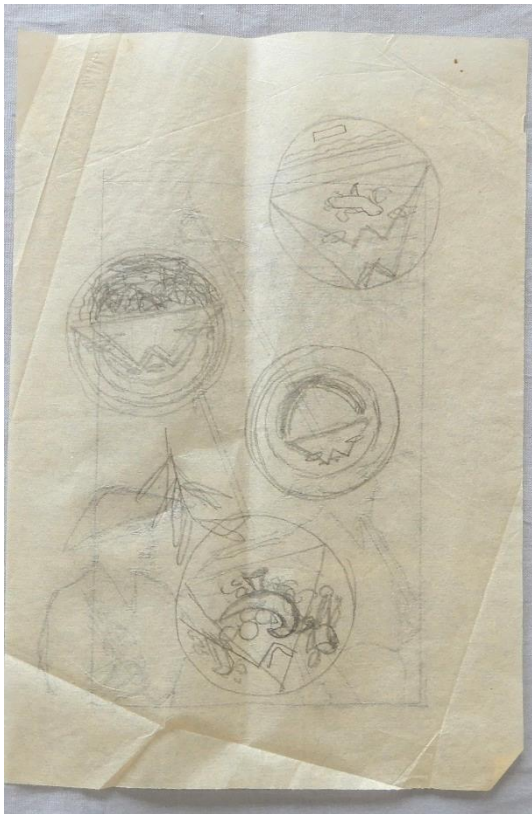
十四 運材中水運利用 其四





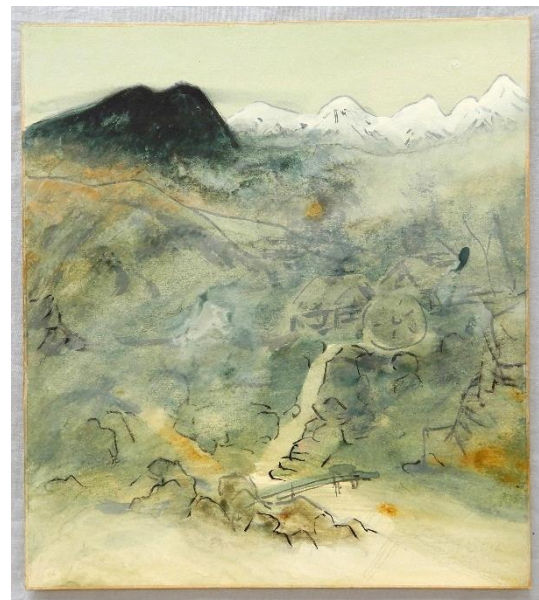


三、運材図絵の下絵？
(裏面はスケッチ)



裏面

四、色紙 水彩画 風景



五、色紙 絵 狐の絵



第二章 小鳥 幸男（おどり ゆきお）

昭和六年（一九三一）八月三日～令和三年（二〇二二）七月二日

俳人。大垣市出身。旧姓は江黒。斐太高校卒。

昭和二十一年（一九四六）高山市職員となり、市民課長、観光課長を経て退職。五十九年（一九八四）高山市民時報社に入社、同年株式会社に改組し代表取締役社長。（有）クロノス、（株）市民時報旅行などグループ社の代表取締役を兼務。後に会長に就任。（社）高山市文化協会長、高山市行政改革審議会議長、高山商工会議所副会頭、高山市環境審議会議長、（宗）桜山八幡宮氏子総代会長、高山ロータリークラブ会長などを歴任。俳誌『飛驒』元代表。俳誌『河』当月集同人。

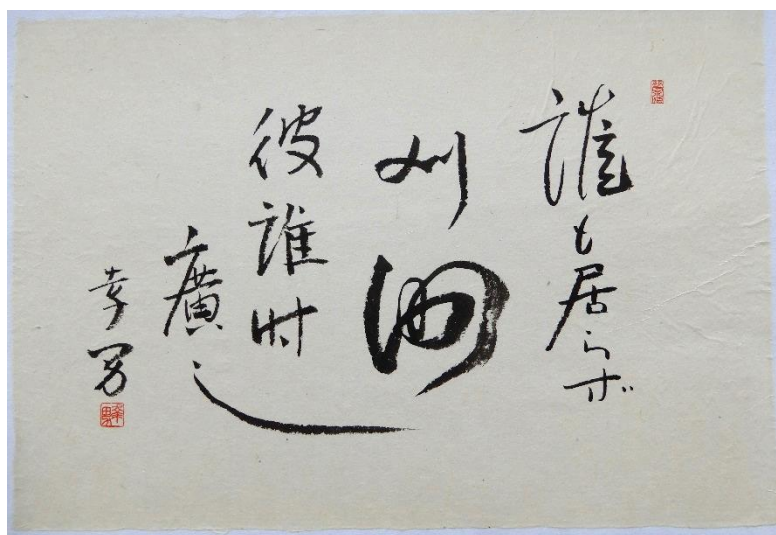
句集『雪』『トロイの城』『死語と寝て』他。著書『飛驒百景』『小鳥幸男著作選集』。「飛驒の子守歌」、長唄「高い山から」を作詞。高山市自治功労者（昭五六）。岐阜県学芸功労表彰（平一〇）。高山市芸術文化顕彰受賞（平十八）。

【飛驒人物事典】



第1節 俳句

一、まくり「誰も居らず刈田^{かはたれ}彼誰時廣し」

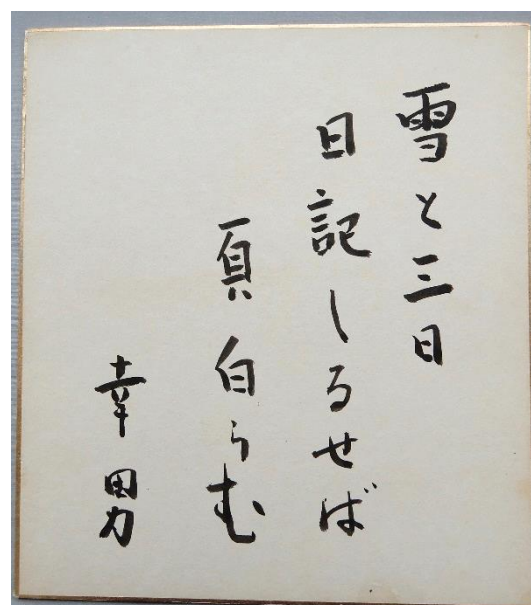


『雪』掲載

昭和二十六年

掲載句は「誰もをらず刈田^たかはたれどき広し」

二、色紙「雪と三日日記しるせば頁白らむ」

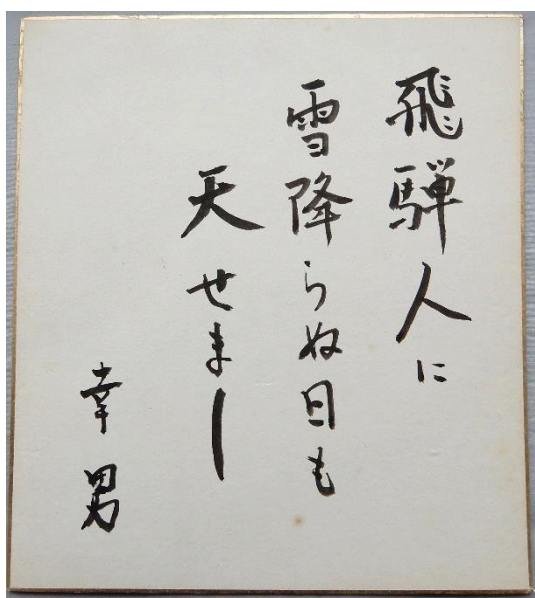


『雪』掲載

昭和二十八年

掲載句は「…白む頁かな」

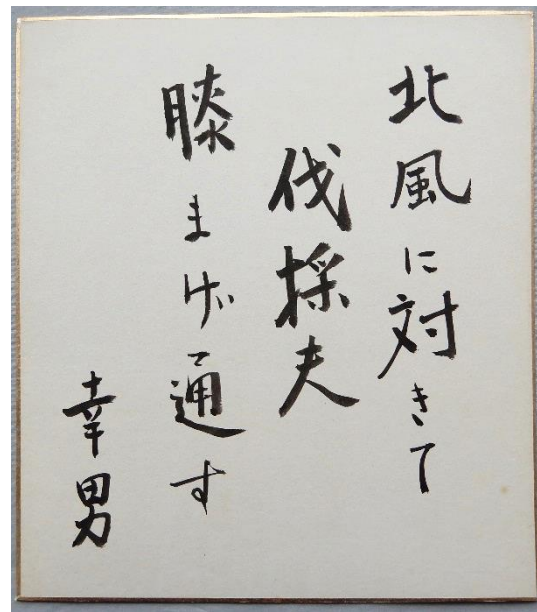
三、色紙「飛驒人に雪降らぬ日も天せまし」



『雪』掲載

昭和三十年

四、色紙「北風きたに対して伐採夫膝まげ通す」

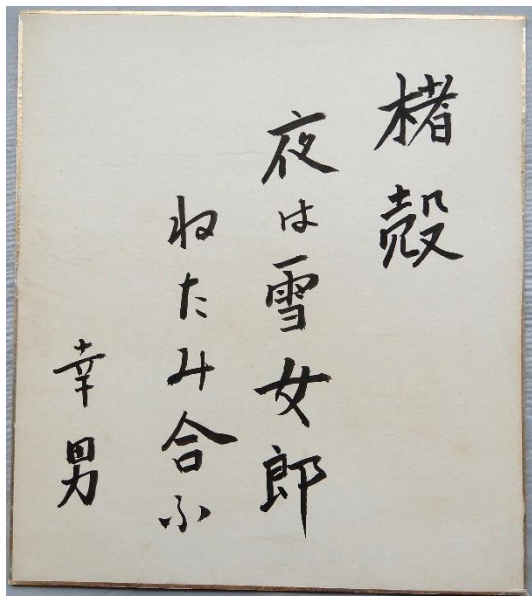


『雪』掲載

昭和三十三年

掲載句は「北風きたに逆らひ伐採夫膝立て通す」

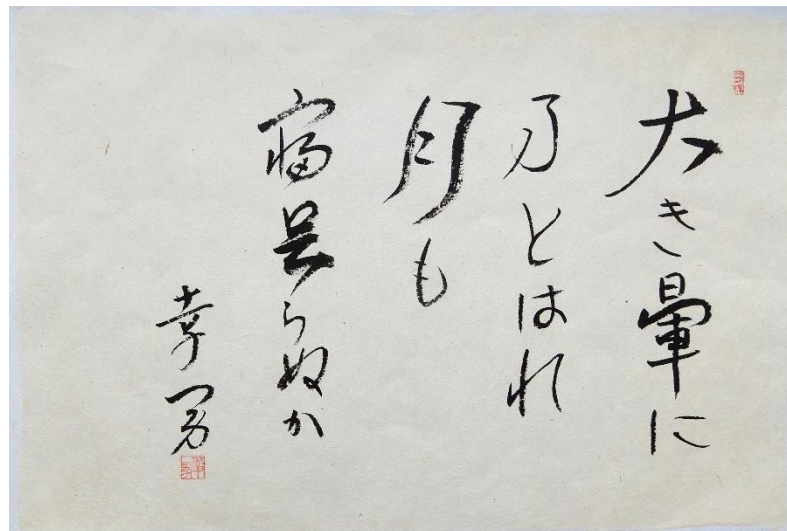
五、色紙「楮殻かうぞがら夜は雪女郎ゆきじょうらうねたま合ふ」



『雪』掲載

昭和四十二年

六、まくり「大きかさ暈かきにまとはれ月も寝足らぬか」

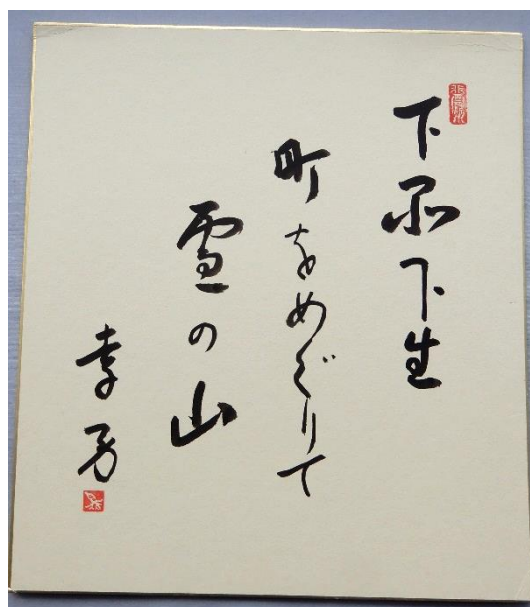


『雪』掲載

昭和五十二年

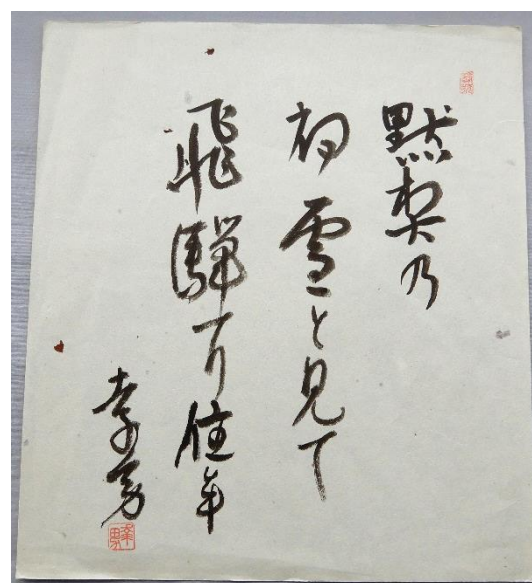
掲載句は「…纏まとはれ…」

七、色紙「下品下生町をめぐりて雪の山」
げほんげしょう



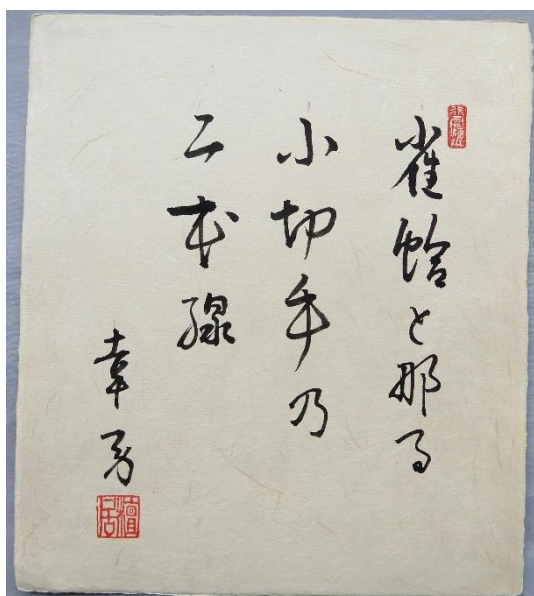
『トロイの城』掲載
平成元年
掲載句は「…繞りて…」

九、まくり「默契の初雪と見て飛驒に住む」



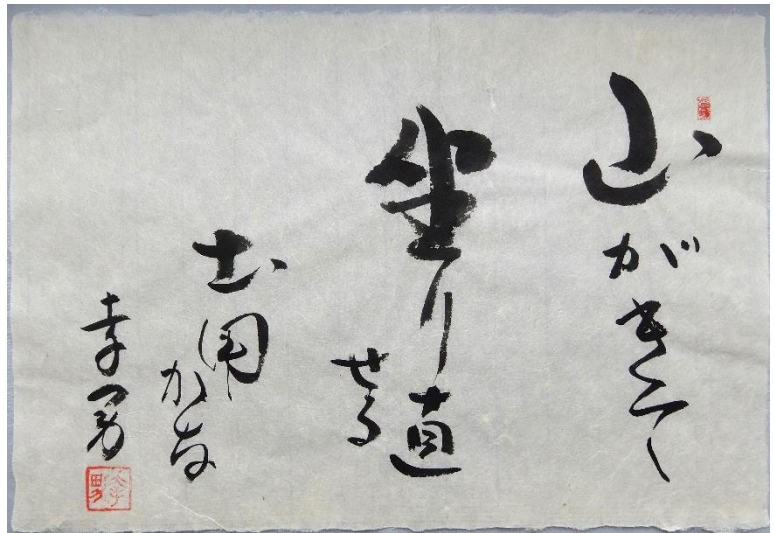
『トロイの城』掲載
平成元年

八、まくり「雀蛤となる小切手の二本線」



『トロイの城』掲載
平成元年

十、まくり「山がきて坐り直せる土用かな」



『死語と寝て』掲載

平成二年

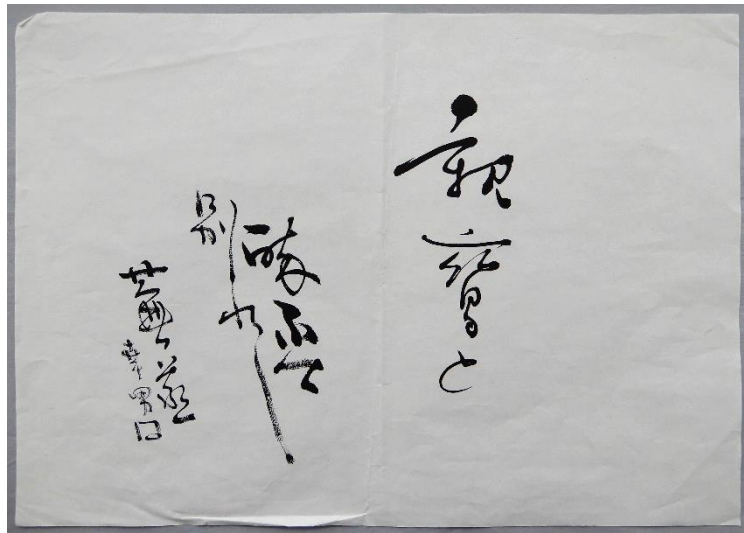
飛騨の里下文学散歩道

「小鳥幸男碑」碑文



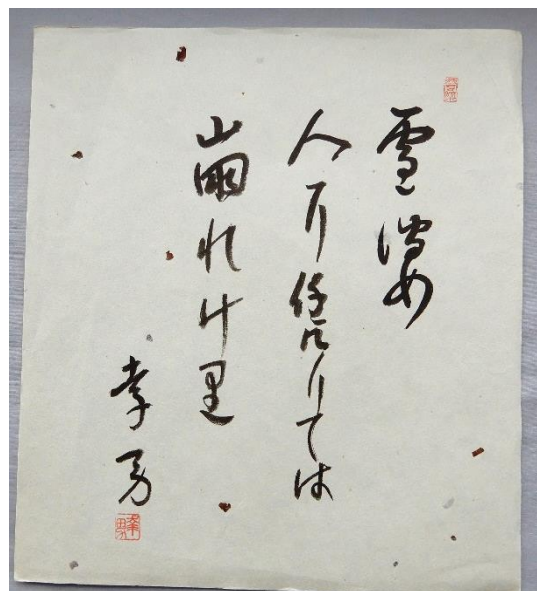
飛騨の里下文学散歩道「小鳥幸男碑」

十一、まくり「親鸞と酔ふて別れし蕪蒸」

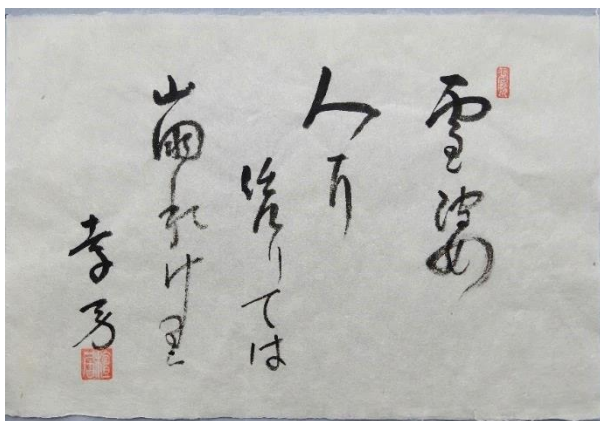


『死語と寝て』掲載
平成二年

十二、まくり「雪婆人^{ゆきばんば}に寄りては崩れけり」

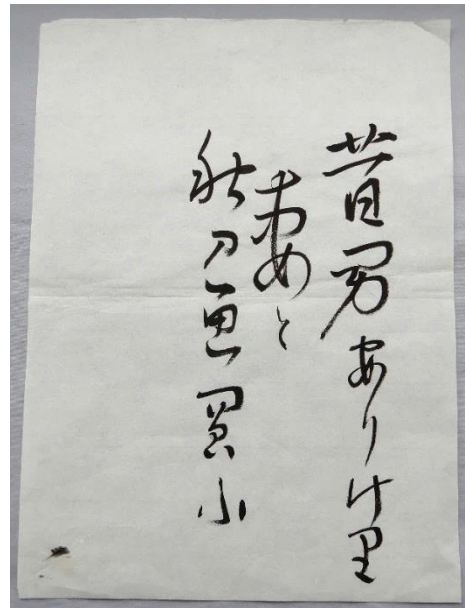


『死語と寝て』掲載
平成二年



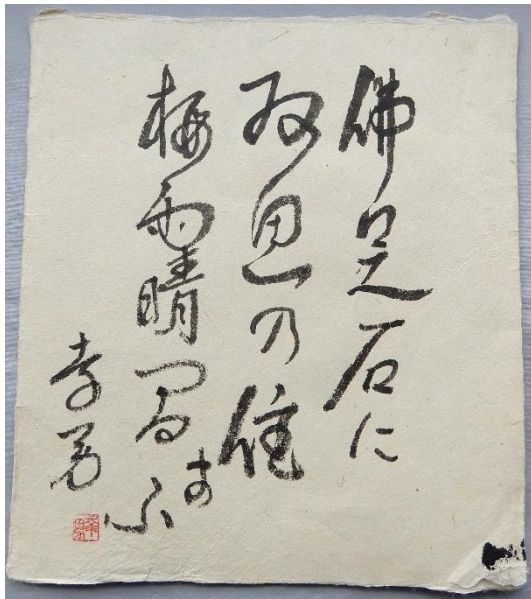
同句

十三、まくり「昔男ありけり妻と秋刀魚買ふ」



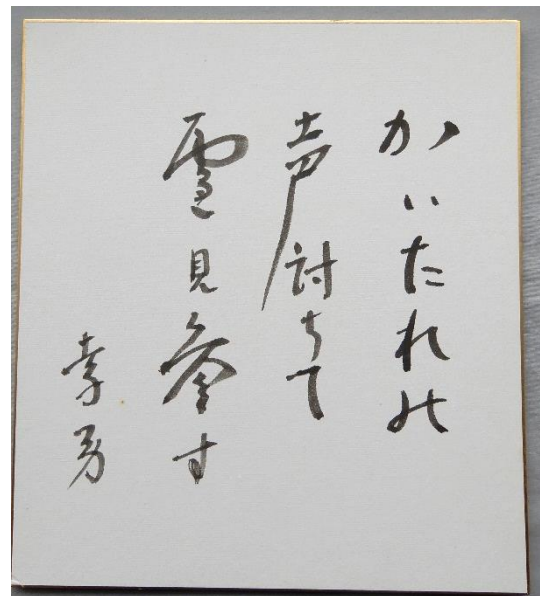
『死語と寝て』掲載
平成二年
掲載は「むかし男ありけり…」

十四、まくり「佛足石に双魚の住まふ梅雨晴間」



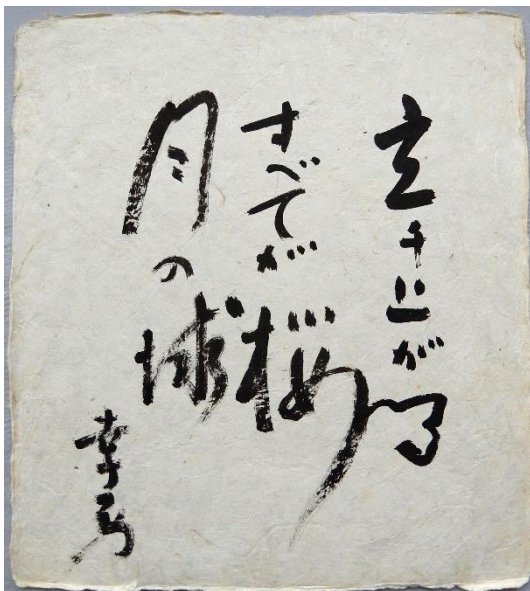
『死語と寝て』掲載
平成四年

十五、色紙「かはたれの声討ちて雪見参す」



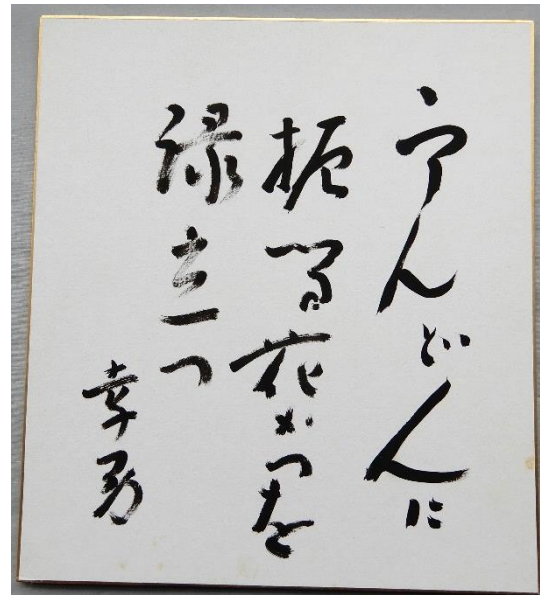
『死語と寝て』掲載
平成五年

十六、まくり「立ち上がるすべてが桜月の城」



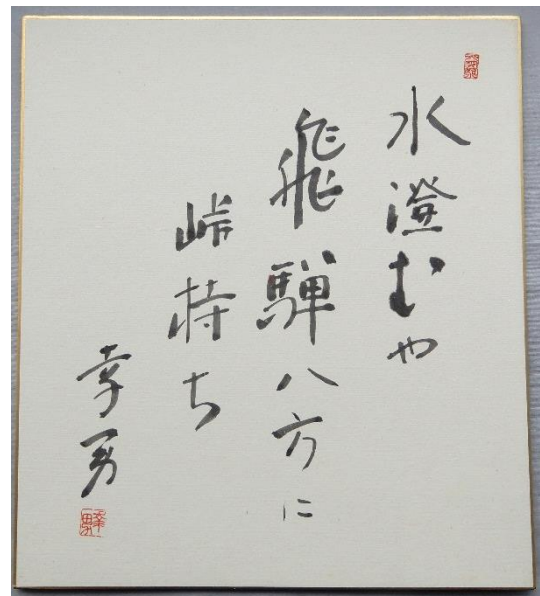
『死語と寝て』掲載
平成五年
掲載句は「立ちあがるすべてがさくら月の城」

十七、色紙「うんどんに振る花かつを緑立つ」



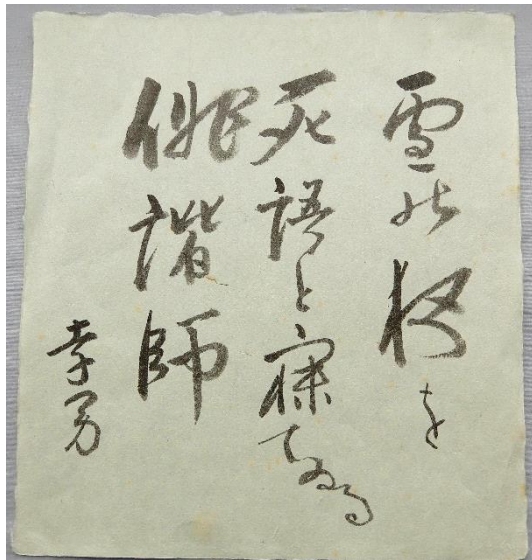
『死語と寝て』掲載
平成六年

十九、色紙「水澄むや飛驒八方に峠持ち」



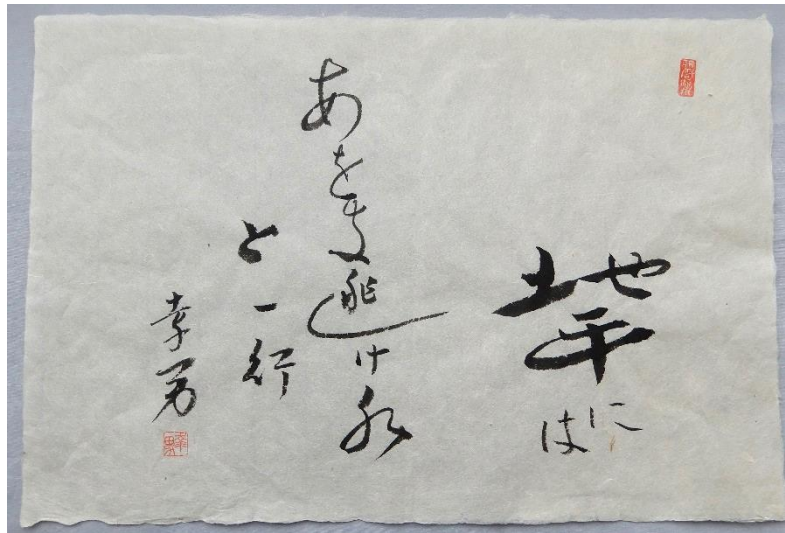
『天骨』掲載
平成八年

十八、まくり「雪の夜を死語と寝てゐる俳諧師」



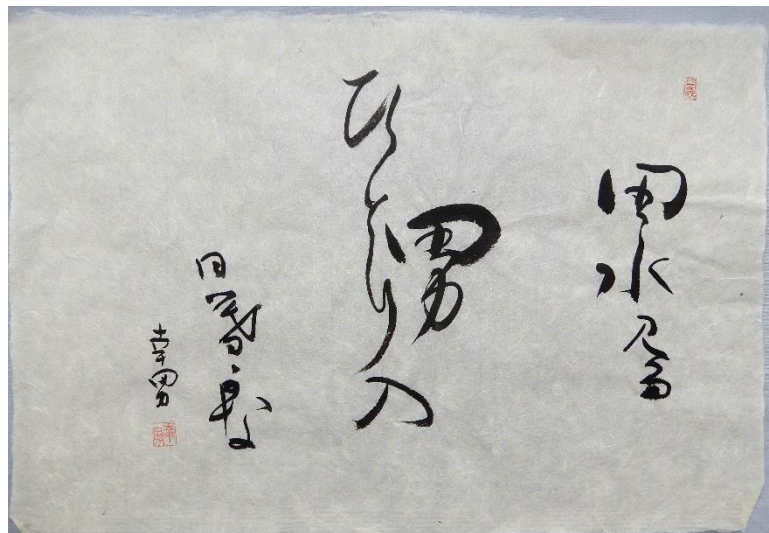
『死語と寝て』掲載
平成七年

二十、まくり「地平にはあをき逃げ水と一行」



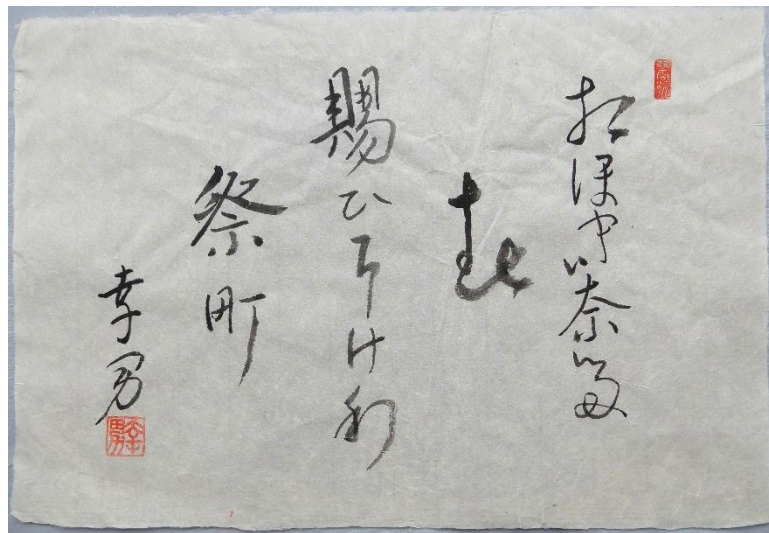
『天骨』掲載
平成十年

二十一、まくり「田水見る男ひとりの日暮かな」



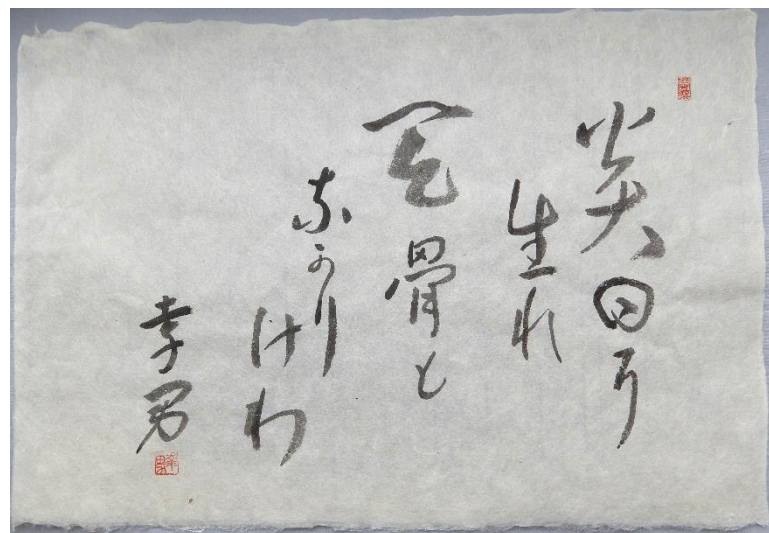
『天骨』掲載
平成十年
掲載は「…一人の…」

二十二、まくり「おほきなる春賜^たひにけり祭町」



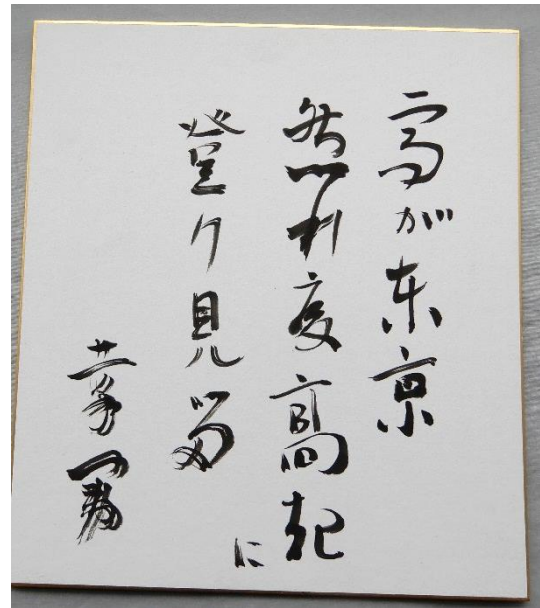
『天骨』掲載
平成十二年

二十三、まくり「炎日^あに生れ天骨もなかりけり」

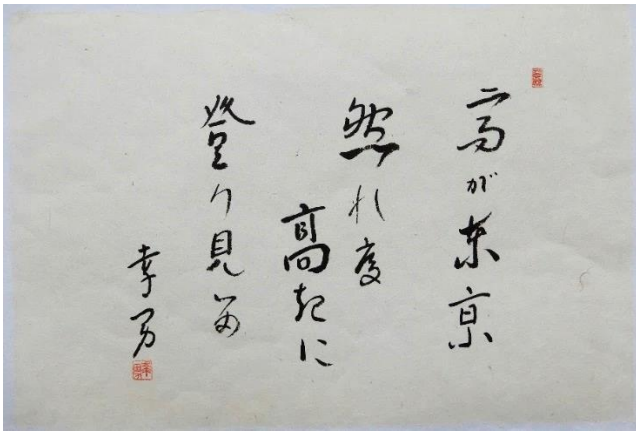


『天骨』掲載
平成十二年

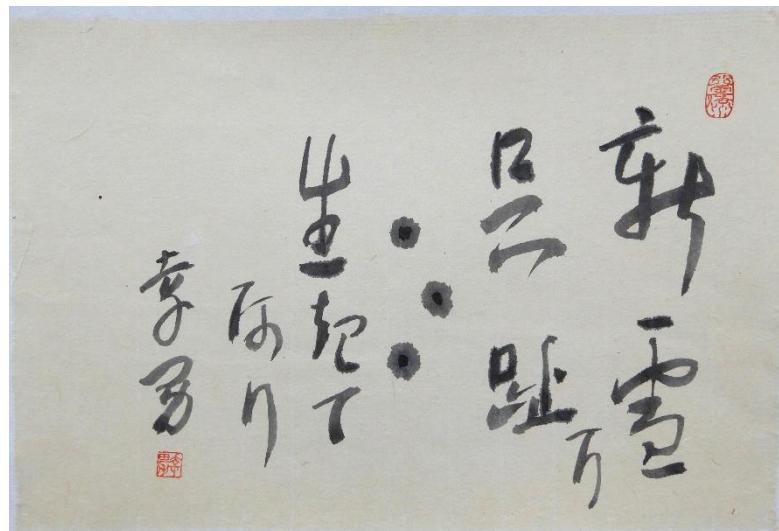
二十四、色紙・まくり「たかが東京然れど高きに登り見る」



『天骨』掲載
平成十三年

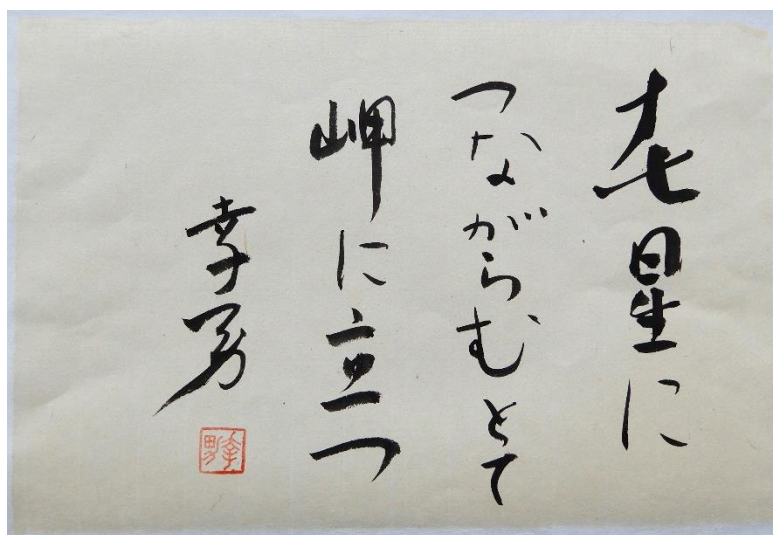


二十五、まくり「新雪に足趾三つ生きてあり」

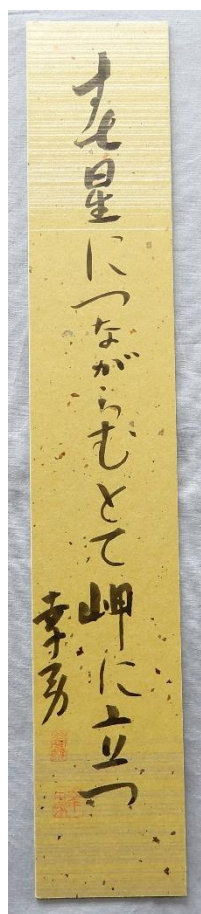


『夕薄暑』掲載
平成十六年

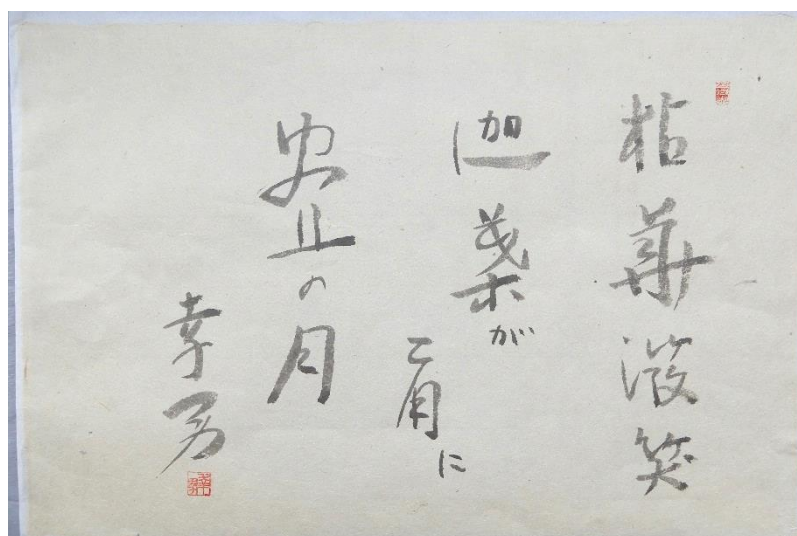
二十六、まくり・短冊「春星につながらむとて岬に立つ」



『春星』掲載
平成十七年

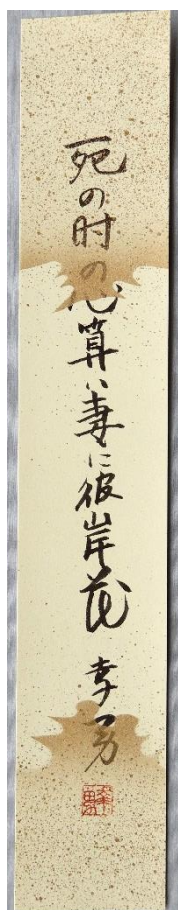


二十七、まくり「拈華微笑迦葉が背に昼の月」
ねんげみせうかせふ せな



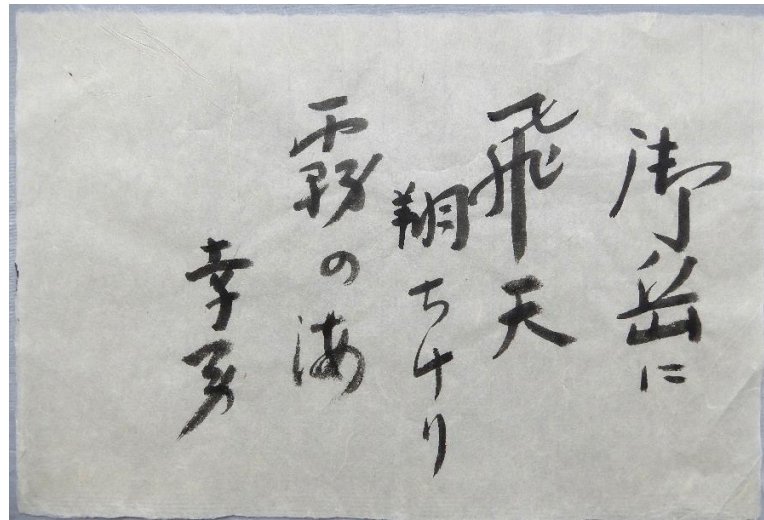
『夕薄暑』掲載
平成十八年

二十八、短冊「死の時の心算は妻に彼岸花」
つもり



『春星』掲載、平成二十二年

二十九、まくり「御岳に飛天翔ちけり霧の海」

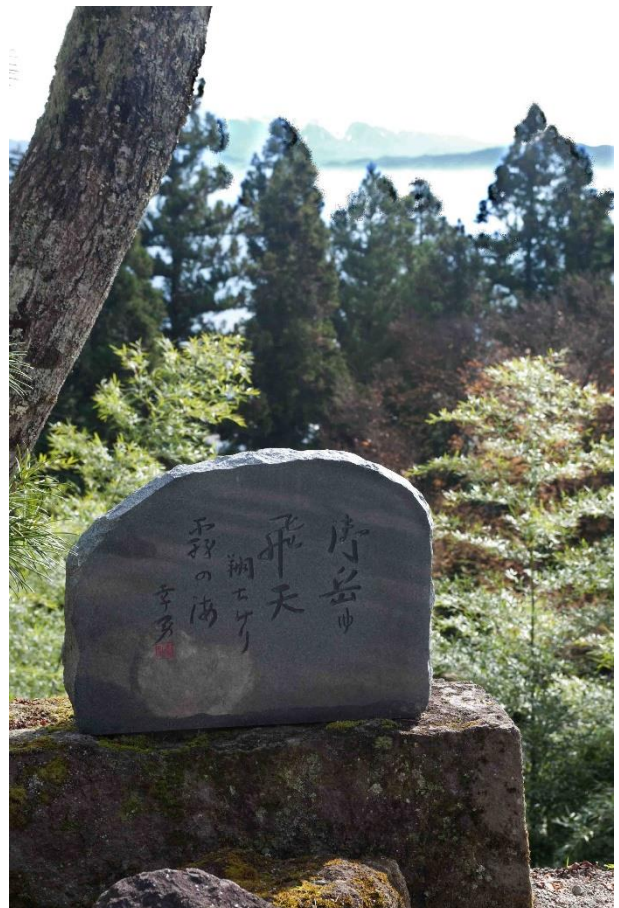


『春星』掲載

平成二十一年

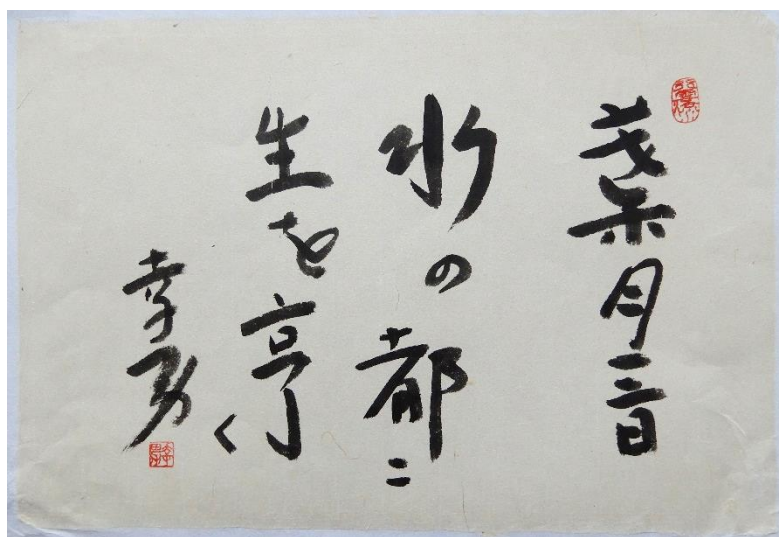
掲載句は「御岳おんたけゆ飛天かの翔かくる霧の海」

千光寺「小鳥雪男碑」碑文
碑文では「御岳ゆ…」



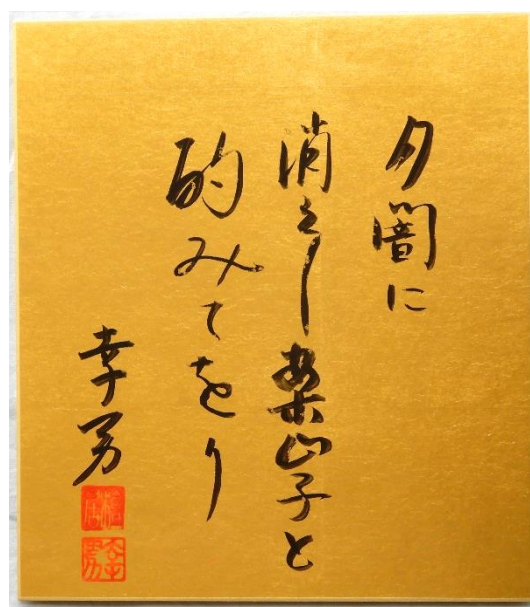
千光寺「小鳥雪男碑」

三十、まくり「葉月三日水の都に生享く」



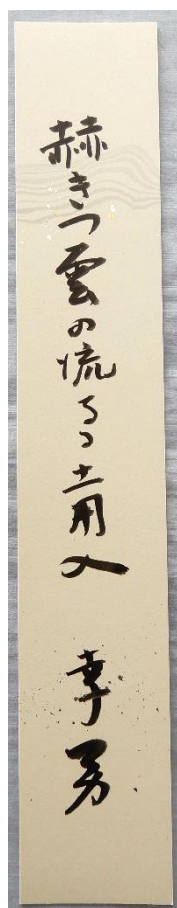
『春星』掲載
平成二十一年

三十一、色紙「夕闇に消えし案山子と酌みてをり」

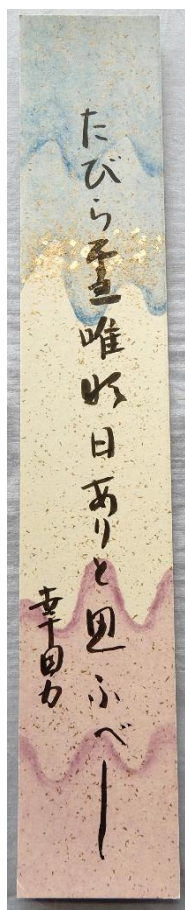


『春星』掲載
平成二十二年

三十二、短冊「^{かがや}赫きつ雲の流るゝ土用入り」

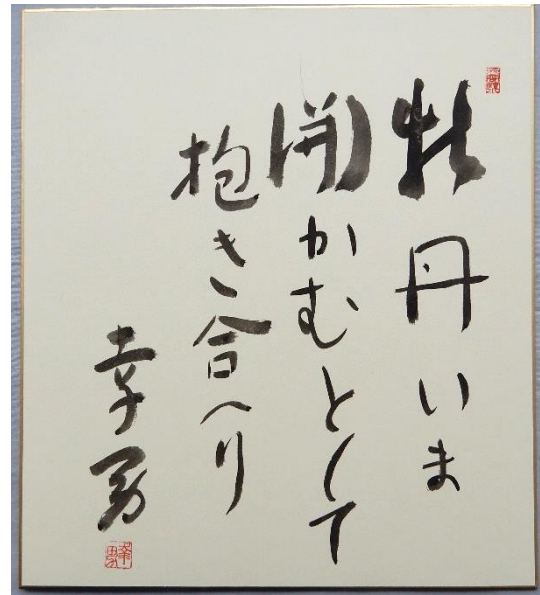


三十三、短冊「たびら雪唯昨日ありと思ふべし」



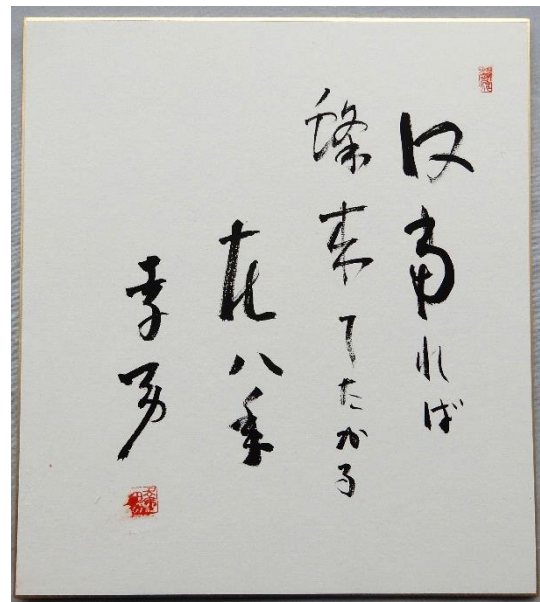
『飛驒ならし』掲載、平成二十六年

三十四、色紙「牡丹いま開かむとして抱き合へり」



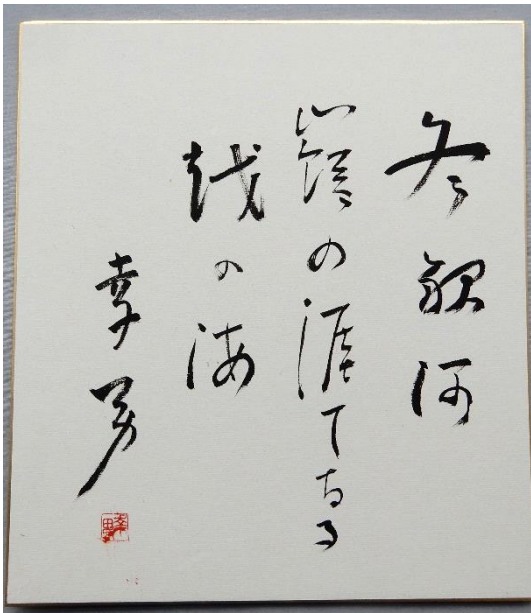
『飛騨ならし』掲載
平成二十六年

三十六、色紙「日当れば蜂来てたかる花八手」



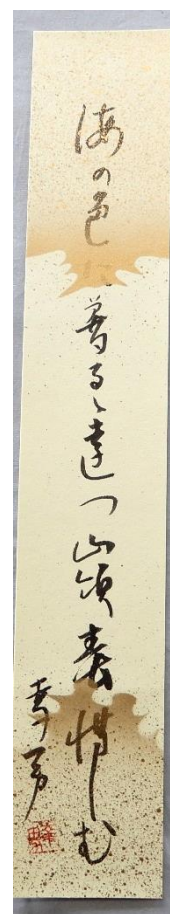
平成二十六年十二月
土筆会月例会

三十五、色紙「冬銀河嶺の涯てなる越の海」



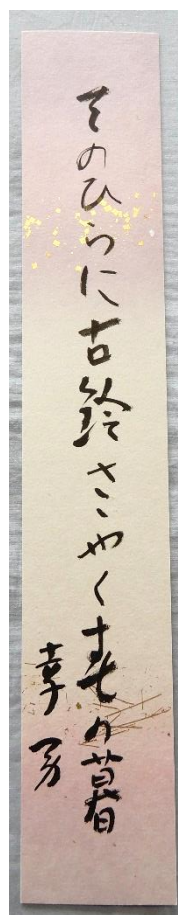
『飛騨ならし』掲載
平成二十六年

三十七、短冊「海の色に暮るる遠つ嶺春惜しむ」



『飛騨ならし』掲載、平成二十七年

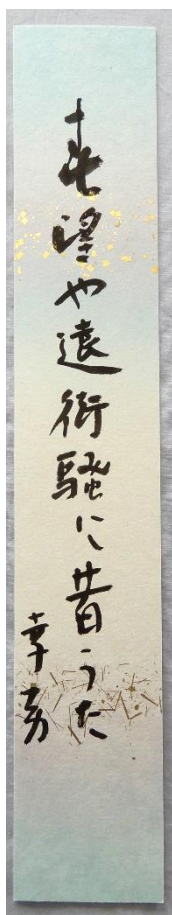
三十八、短冊「手のひらに古鈴さやく春の暮^{これい}」



『飛騨ならし』掲載、平成二十七年

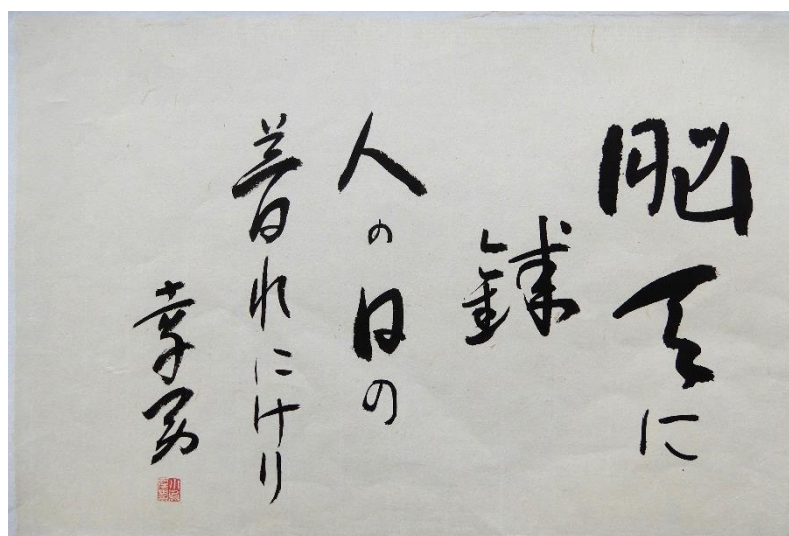
掲載句は「てのひらに古鈴ささやく浅き春」

三十九、短冊「春望や遠街騒に昔うた^{とほまちさあ}」



『飛騨ならし』掲載、平成二十七年

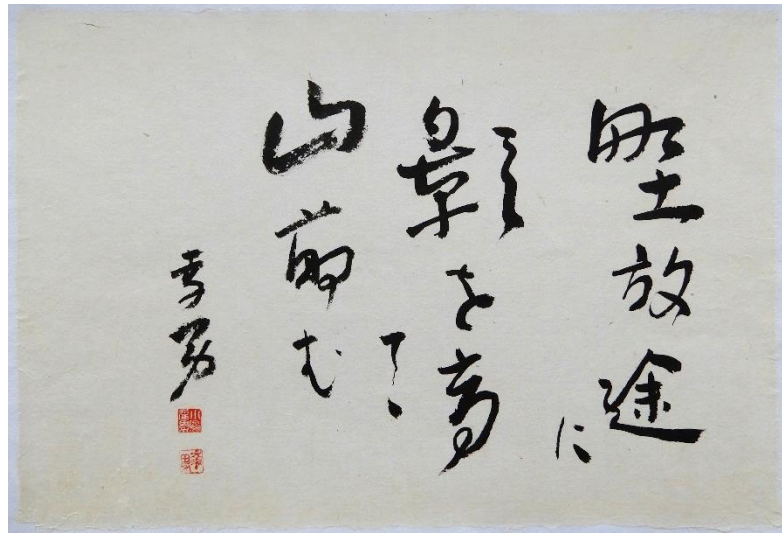
四十、まくり「脳天に鍼人の日の暮れにけり」



『飛騨ならし』掲載

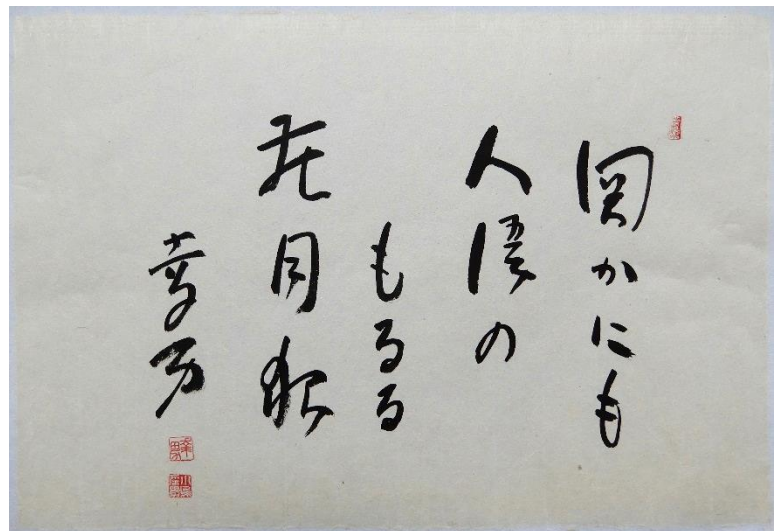
平成二十八年

四十一、まくり「野放途に影を育てて山萌む」
めぐ



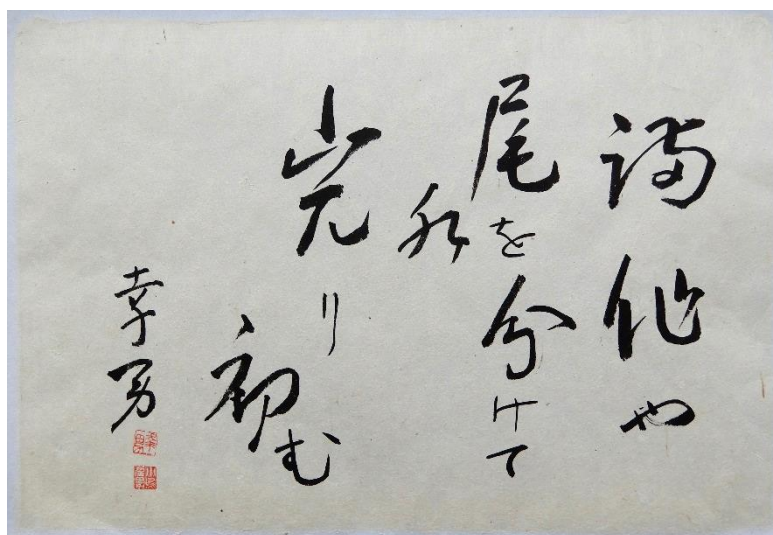
『飛驒ならし』掲載
平成二十九年

四十二、まくり「圓かにも人語のもるる花月夜」



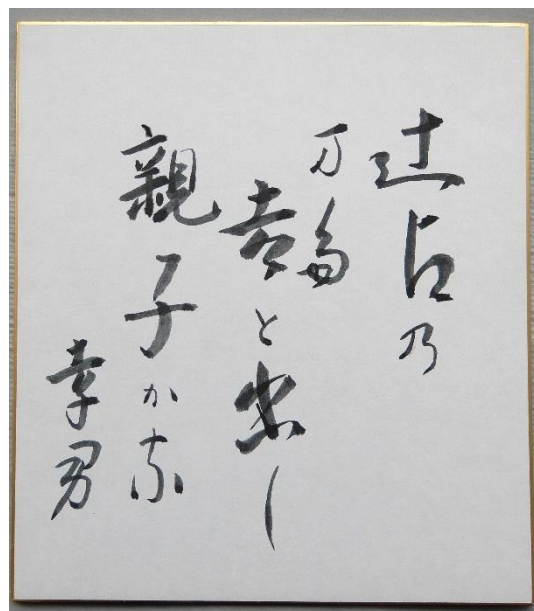
『飛驒』二二四号掲載
平成三十年
掲載句は「圓かまどなる人語
こぼるる花月夜」

四十三、まくり「満作や尾を分けて水光り初む」

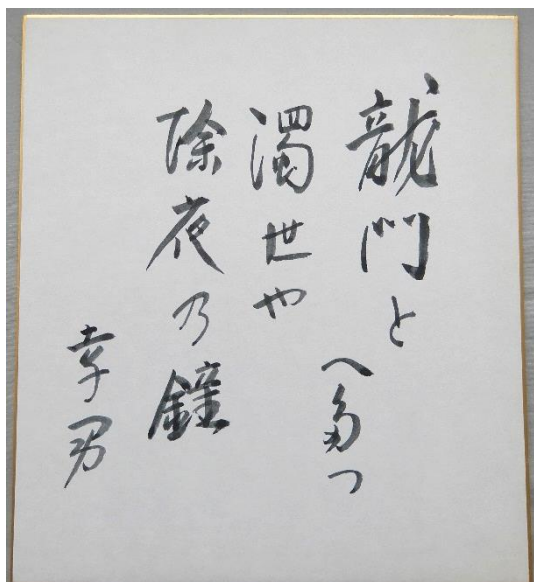


平成三十一年二月
飛騨俳句会
俳句会発表時は『満作』
を『金縷梅』と

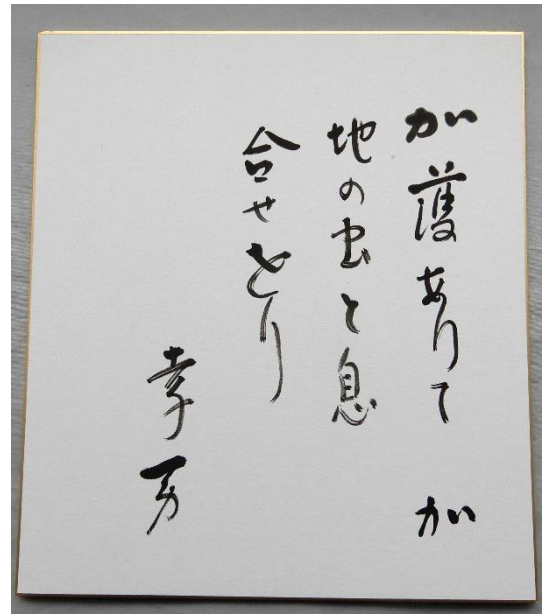
四十四、色紙「辻占のまた吉と出し親子かな」



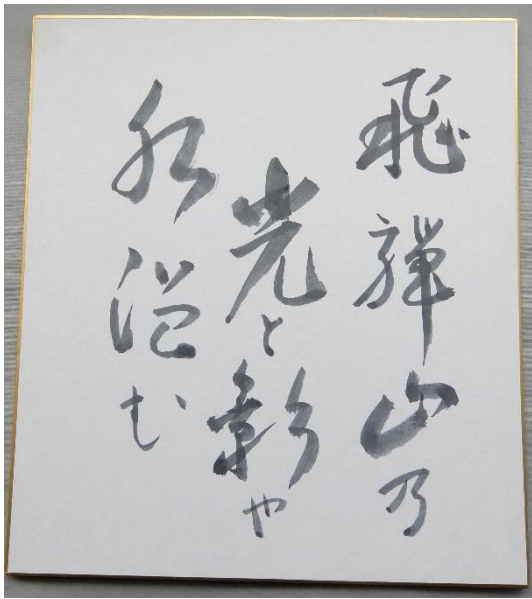
四十五、色紙「龍門とへだつ濁世や除夜の鐘」



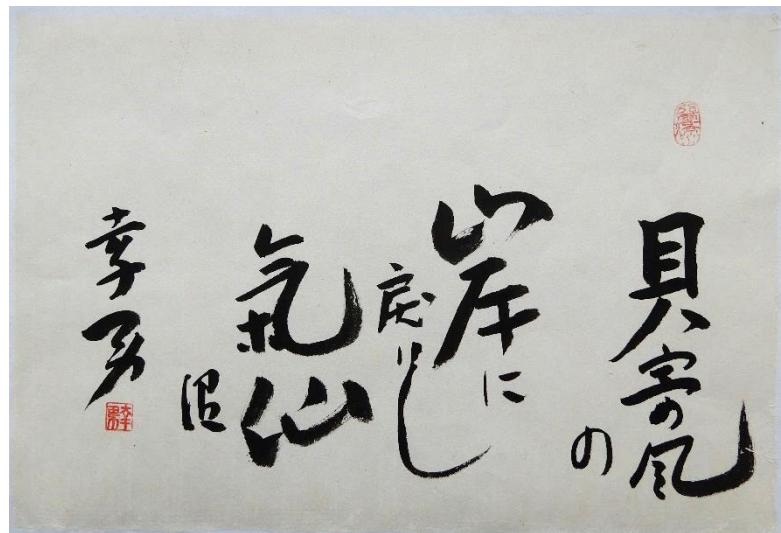
四十六、色紙「加護ありて地の虫と息合せをり」

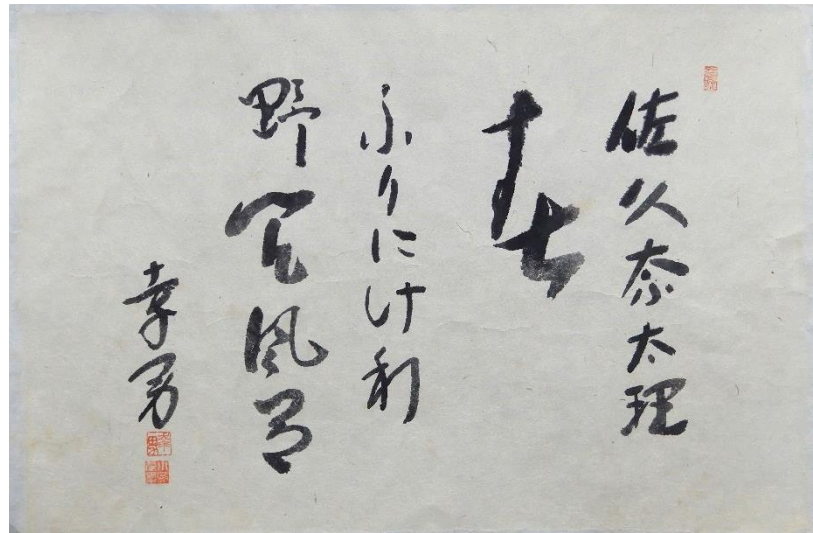


四十七、色紙「飛驒山の光と影や水温む」

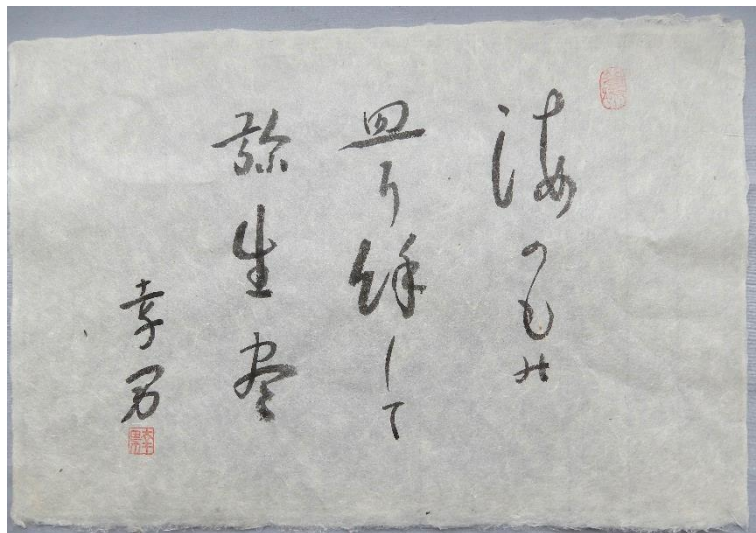


四十八、まくり「貝寄風の岸に戻りし気仙沼」



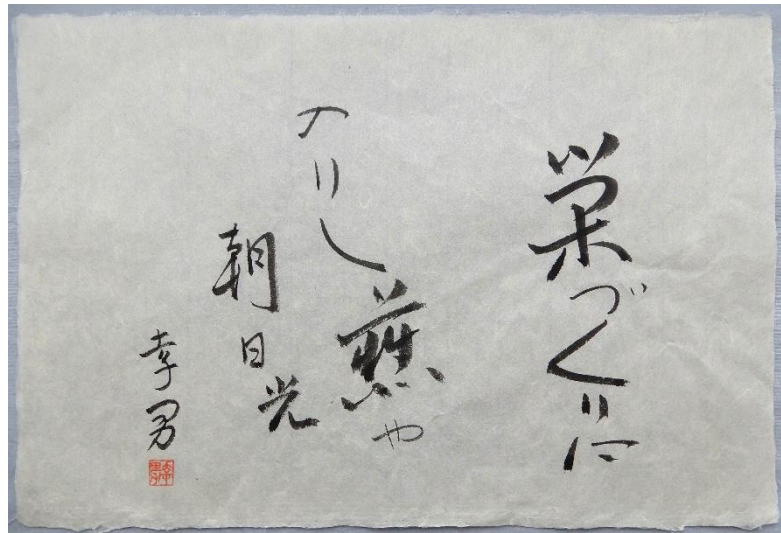


四十九、まくり「佐久奈太理春ふりにけり野天風呂」

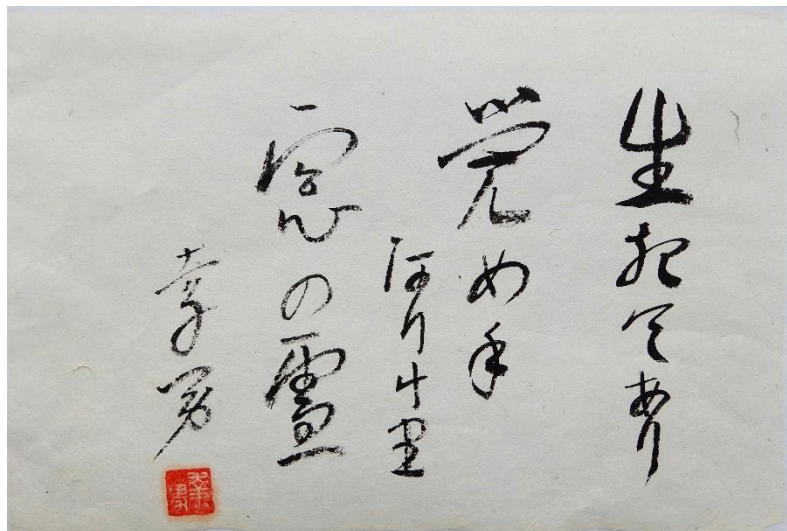


五十、まくり「海のもの皿に餘して弥生尽」

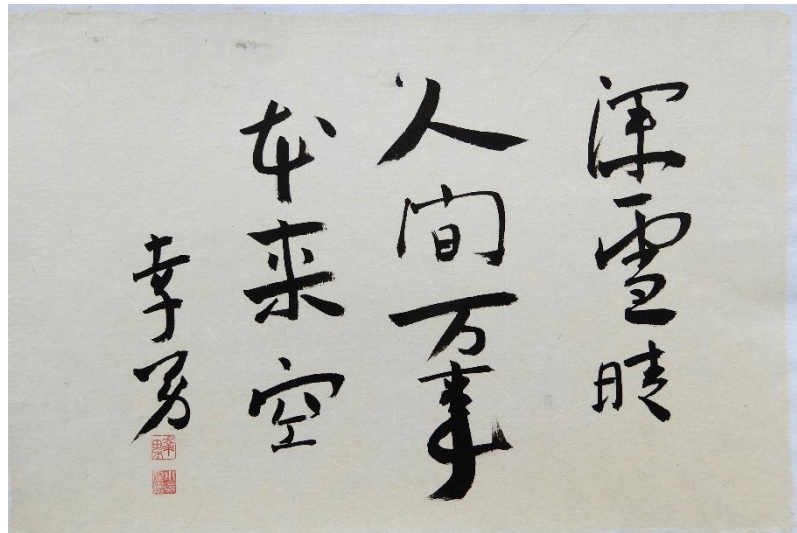
五十一、まくり「巣づくりに入りし燕や朝日光」



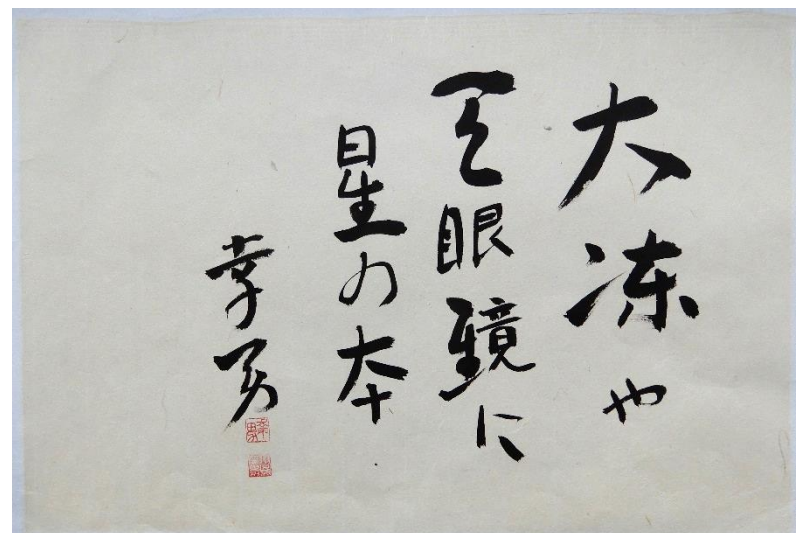
五十二、まくり「生きてあり覚めてありけり窓の雪」



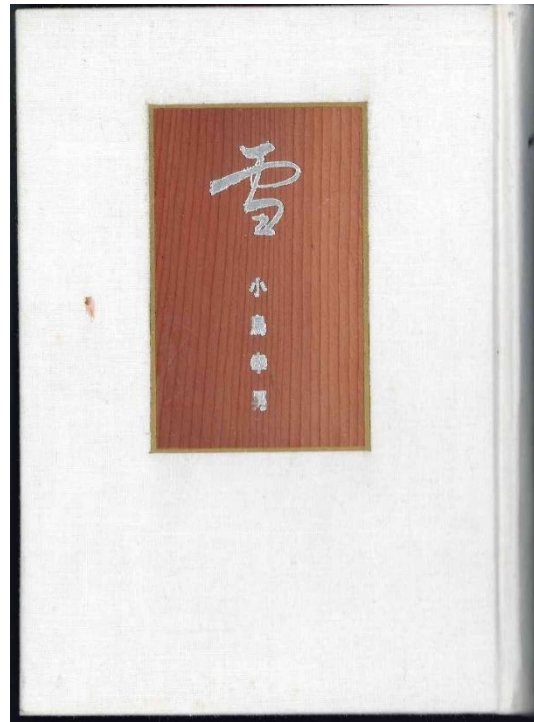
五十三、まくり「深雪晴人間万事本来空」



五十四、まくり「大凍や天眼鏡に星の本」



第2節 句集
一、第二句集「雪」



昭和 53 年発行

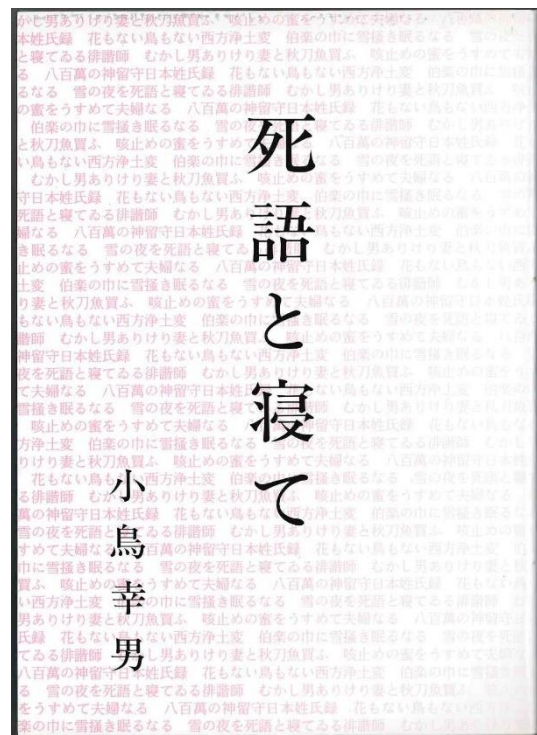
二、第二句集「トロイの城」



平成 2 年発行、河叢書第 140 号

「水馬みずすまし
「水馬トロイの城は門を開け」

三、第三句集「死語と寝て」



平成 8 年発行、河叢書第 192 号

「雪の夜を死語と寝てゐる俳諧師」

四、第四句集「天骨」



平成 15 年発行

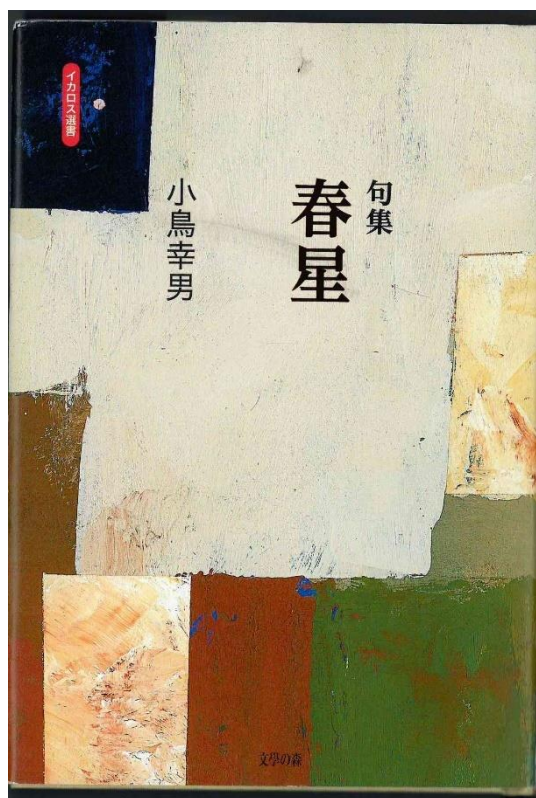
「炎日^あに生れ天骨もなかりけり」

五、第五句集「夕薄暑」



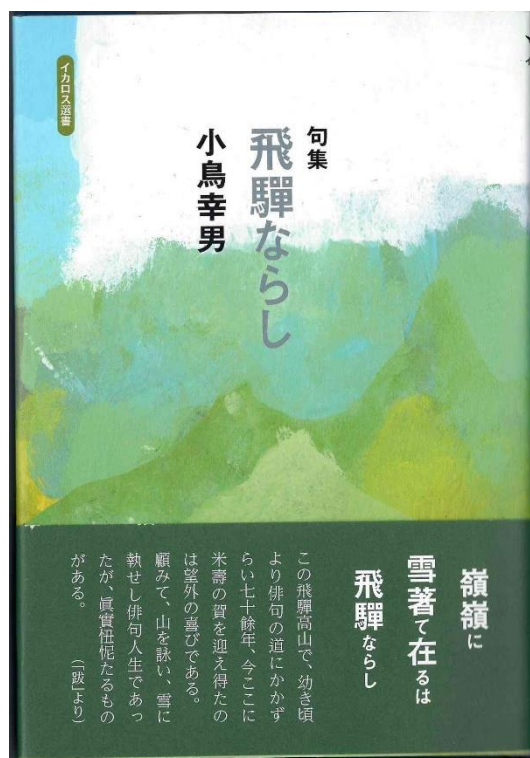
平成18年発刊
「夕薄暑何に押さるる車椅子」

六、第六句集「春星」



平成24年発刊
「春星につながらむとて岬に立つ」

七、第七句集「飛驒ならし」



平成30年発刊
「嶺嶺に雪著て在るは飛驒ならし」

高山市近代文学館調査・研究報告書

令和五年三月発行

編集・印刷 一般社団法人 高山市文化協会